

日本台湾学会 ニュースレター

第 16 号

2009年5月

<目次>

巻頭言 1

特集 ○○研究(者)から見た

「台湾」・「日本の台湾研究」 2

学会・シンポジウム等参加記 18

日本台湾学会活動報告 25

巻 頭 言

「台湾史」と「日本史」の間 —台湾で考えたこと— 日本台湾学会理事長 春山明哲

昨年(2008年)の9月中旬から12月末までの3か月余り、国立政治大学台湾史研究所の招聘により、客員教授として台湾の大学院生に集中講義をする機会を得た。また、台湾に滞在している間に何度かシンポジウムでの発表や講演を行うことになった。これらの機会を通じて多くの研究者と知り合い、意見交換することもでき、私にとっては実に充実した時間であり、楽しい経験であった。

政治大学における私の講義のテーマは「帝国日本の台湾統治政策—1895-1945 基本政策・人物研究・資料論」で、私の著作『近代日本と台湾—霧社事件・植民地統治政策の研究—』(藤原書店)をテキストに、助理教授の李為楨さんと李衣雲さんによる通訳により講義を行った。授業は毎週1回水曜日の午前9時10分から途中休憩を挟んで12時まで、全部で14回行い、ほかに史料読解演習と「歴史散歩」と称して蔣渭水と台湾文化協会の故

地めぐりをした。受講生は15人(博士課程5人、修士課程10人)、そのうちには日本人の留学生3人がいた。学生はみな熱心でほぼ全員が毎回出席で、しかも明るい雰囲気楽しく授業が進められた。

授業の中で気がついたことのひとつは、日本史に関する基本的な理解、とくに近代政治史の基礎知識が学生達には不足していることであった。歴史的な用語たとえば「藩閥」とか「条約改正」とか「委任立法」などは、翻訳というより内容の説明が必要であった。日本による台湾統治の基本法である「六三法」は、「明治憲法」(大日本帝国憲法)の理解が前提になるが、この中国語訳が見つからない。国立中央図書館台湾分館で明治時代の法律関係雑誌の中に漢文訳があるのを発見してコピーを学生に配ったこともあった。伊藤博文、原敬、吉野作造、美濃部達吉といった人物についても説明がある。これはむしろ当然のことであろう。授業に関する感想でも、日本本国の政治過程のところが最も理解が難しかった、という学生が多かった。

中央研究院台湾史研究所のシンポジウムでは、後藤新平の「思想形成」と「台湾経営」の関係という視点から報告を行った。後藤新平についての台湾の研究状況を政大の日本人留学生に調べてもらったが、「正面」からの本格的な研究はないようである。後藤新平の重要性は認識されているが、後藤新平文書などの一次史料を使うことは若い研究者にとって困難なことだ、というのがある台湾人研究者の見解である。これもむべなるかな、という感じである。かく言う私もとても使いこなしているとは言えない。

国立中央図書館台湾分館が主催した台湾学シンポジウムでの基調講演と国立師範大学における2回の講演では、後藤新平、岡松参太郎、井上伊之



政治大学の教員・受講生らと（筆者前列中央）

助、新渡戸稲造、矢内原忠雄といった、台湾にかかわりの深い日本人を採り上げた。私が台湾で感じたことのひとつは、台湾にとって「日本」がどんどん遠くなっている、その歴史的存在感が希薄になっている、ということであった。植民地帝国日本もほどなく台湾人の「実経験」から消えるだろうが、その時なお台湾人にとって意味のある人物は誰だろう。こう考えた時に、私としてはこれらの人々は思い出す価値がある、と思って話をしたのである。師範大学の講演では、聴衆が台湾史研究所と歴史系の院生ということもあり、前置きとして私としては珍しく「台湾近代史とはなにか」という歴史哲学・歴史方法論的な（？）問い掛けを行った。

また、台南の成功大学では「日本における台湾史研究の100年」というテーマで講演した。考えて見るとこれも「台湾史研究」という領域そのものについての私の問題意識が背景にある。

台湾における「台湾史」研究の発展は目覚ましいようである。この中で「日本史」、帝国日本の歴史研究はどのような位置関係にあるのだろうか。台湾の研究者の何人かから「台湾史研究のための日本史の基礎知識」のような研究ガイドブックが必要だ、という意見を聞いた。「台湾史」と「日本史」の間について、実践的な研究方法を考える時期にきているようだ。台湾で考えたことのひとつである。

特 集

〇〇研究(者)から見た 「台湾」・「日本の台湾研究」

日本台湾学会は昨年に10周年記念大会を開催し、6月には第11回学術大会が開催されます。新たな10年に向けて、狭義の台湾研究ではない方々に学会内外からご寄稿いただきました。

これに併せて、台湾で台湾研究を行う方々からも、台湾研究の現状についてのご意見をいただきました。（括弧内は職名等、順不同）

一国際法学者からみた「台湾」と日本 一国際法研究の視点から

安藤仁介（世界人権問題研究センター所長、
京都大学名誉教授）

私は昨年、「国際人権保障体制確立への国際法的歴史的アプローチ」と題する日台ワークショップに参加した。その関係で、このニューズレターに一文を寄せるよう、ご依頼を受けた。私は日本人であり、かつ国際法を専攻している。その立場から台湾と日本の係わり合いを見ると、国際法的に重要な三つの出来事が浮かび上がってくる。以下それらを中心に、若干の感想を述べてみよう。

第一の出来事は、日露戦争後の1895年、台湾が日本に割譲されたことである。そもそも歴史上、台湾の存在が確認されるのは、遅くとも元朝の時代であったとされるが、元朝の支配は澎湖諸島はともかく台湾本島には及ばず、その状況は明朝に受け継がれた。16世紀末以降には、スペインと並んで世界を二分したポルトガル、次いでオランダ、スペインと西欧諸国が台湾の植民地争いを展開した。ただし17世紀後半、清朝に滅ぼされた明朝の再興を図る鄭成功が、植民地争いに勝利したオランダ人を台湾から放逐したが、彼の死後1683年に台湾は清朝の領域に組み込まれた。清朝は鄭成功と同様、対岸の福建省、広東省からの移民を奨励して台湾の開拓を進め、1885年には「台湾省」として福建省から分離させた。しかしその直後、「下関条約」により台湾は日本へ割譲されたのである。なお中国では、1911年の辛亥革命により清朝が倒れ、中華民国政府が成立した。

日本の台湾統治は基本的に植民地支配であって、統治機構や主要産業もそれを具現化しており、これに対する漢族系官・民の抵抗は、武力抗争こ

そ 1915 年の大弾圧で収束したものの、地下運動は第二次世界大戦まで続いたといわれる。他面、半世紀に及ぶ日本の統治を通じて、産業・交通・法制・教育制度の近代化など、社会的インフラの整備が進められ、従前に見られなかった多くの変革が台湾にもたらされたのである。

第二の出来事は、日本が第二次世界大戦で連合国に敗れて台湾と澎湖諸島を中華民国へ返還し、それを 1951 年の対日平和条約を受けた翌 52 年の日華平和条約で確認したことである。ただし日本の敗戦後、中国大陆では蒋介石の指揮する国民党軍と毛沢東の率いる共産党軍との内戦が再発し、戦いに敗れた国民党軍は台湾・澎湖諸島地域に追い落とされた。台湾では、戦前から台湾地域に住んでいる住民を本省人、戦後に大陸から逃れてきた国民党関係者とその子孫を外省人、と呼んで区別するが、本省人を日本の植民地支配から解放するはずであった国民党の統治は、逆に植民地支配者よりも過酷な圧政となった。

とくに国民党政権は、外省人の横暴に対する本省人の不満が爆発した 1947 年 2 月 28 日蜂起を軍の出動により徹底的に弾圧した。また、先に一方的に制定した憲法を停止して戒厳令を敷いたほか、同じく一方的に実施した 1947 年の選挙で最高機関たる国民大会の代表を選出し、ごく最近に至るまで改選すら行わなかった。そして国民大会が選出する総統の地位は、1950 年から 75 年の死去まで蒋介石が、78 年から 88 年の死去まで息子の蔣経国が、それぞれ占め続け、独裁政権下で住民の政治的自由は圧殺されたままであった。

しかし、蔣経国の副総統を務めた本省人の李登輝が 1988 年に総統の地位に就くと、台湾の民主化・自由化は着実に進められた。まず前年には戒厳令が解除され、次いで 91 年の憲法改正により蒋介石の悲願であった“大陸反攻”の法的根拠がなくされるとともに、中華民国の統治地域が台湾、澎湖諸島、金門・馬祖の両島に限定された。また国民大会と立法院の議員が住民の直接投票で選出されることとなり、96 年には総統選挙も同様になった。台湾の民主化・自由化は、李登輝について総統に選ばれた独立志向の強い民進党の陳水扁の下でさらに促進された。加うるに李登輝以来の科学・技術開発により、台湾は経済的にも躍進した。

第三の出来事は、1972 年の日中共同宣言により、日本が中国を国際的に代表する政権として、中華民国政府に替え中華人民共和国政府を承認したことである。第二の出来事で見たとおり、第二次世界大戦の連合国に中国を代表して参加していたの

は中華民国であり、同政府は国際連合でも中国を代表し続けていた。日本も米国と同様、中華民国政府が中国を国際的に代表する政権と見なしてきた。しかし国際社会で、中華人民共和国政府を中国の代表政権として承認する国家が次第に増え、1971 年には国際連合総会がこれを正式に認めるに及んで、日本も中国の政府承認を切り替えたのである。

ただし、その後も日本と台湾の間では民間協定の形式で交流が続けられ、船舶・航空機の相互乗り入れ、交易・経済関係や教育・研究関係の人の往来は盛んである。また日本政府も 72 年の共同宣言に際して、中華人民共和国側の「日華平和条約は無効、台湾は中国の一部」という主張に対し、「日華平和条約により日本と中国の戦争は正式に終結した。かつ台湾地域に関する中国側の主張は理解・尊重するが、日本としては対日平和条約の立場を堅持する」と述べている。これは、日華平和条約が締結の時点では有効であったこと、かつ日本は対日平和条約で台湾地域に対する主権を放棄したが、その地域が中華人民共和国の統治下に現に入っていることまで認めるものではないことを意味している。

以上の諸事実が物語るように、日本は台湾とその住民の生き方に対して、大きな影響を与える措置を執ってきた。昨年の選挙で国民党・親中派の馬英九が総統に選ばれたことは、台湾に民主主義が根付きつつある事実の反映である。だが、それは同時に、私を含む日本人が台湾の将来について関心を持ち続ける必要を強調する事実でもあるだろう。その意味で、日本における台湾研究の一層の進展を祈念するものである。

受難の台湾文学研究 —中国文学研究者の視点から 山田敬三 (孫中山記念会参与、神戸大学名誉教授)

台湾を研究対象とする学会が結成され、その研究成果が次々に公表されるという事態を 30 年前に想像することは、少なくとも私には困難だった。いま台湾文学研究で活躍している知人の研究者は、1960 年代に学生として台湾へ旅行したことを「80 年代の終わり頃」まで沈黙していたという。また、80 年代初期に台湾を訪れたある著名な現代中国研究者も、同業の専門家からの批判を覚悟した上で訪台だったと、帰国後に総合雑誌に記されてい

たことがある。戦後日本のインテリゲンチヤにとって、かつて台湾はそんな地域であった。

国際社会では東西が冷戦状態にあり、西側に与して中国大陸とは公的な交渉をもととしない日本政府の姿勢に批判的であった日本の知識人は、ある意味では台湾＝中華民国を敵視、政治的に台湾を拒否していたのである。一般の中国研究者にとって台湾は研究の対象外であったと言っても過言ではなかった。1979年10月に日外アソシエーツから発行された『中国文学研究文献要覧』及びその翌年に同社から出た『中国文学専門家事典』は戦後の中国文学研究を系統的に分類した資料集だが、ここには台湾文学に関する記載はまったく見られない。

そのころまで、日本国内で台湾文学にコミットしていたのは王育徳氏や張良沢氏のような台湾出身の研究者であり、日本語訳で出版された作品は黄春明の「さよなら・再見」を初めとする一連の短篇小説くらいであった。そしてそれらの訳者は中国文学研究とは無縁の人であった。いやそもそも、台湾文学が中国文学の一環であるという認識は中国文学研究者の間にはなく、台湾に文学のあることさえ知られていなかったといっても言い過ぎではない。その反面、台湾文学は「台湾文学」であって、「中国文学」ではないという見解も、とりわけ台湾出身の研究者間では根強くあった。

だがそんな時、こうした時流とは無関係に、台湾研究を学問的に追究していたのは、本学会の設立提唱者である若林正文さんたち東京の大学院生グループだった。その成果は「台湾近現代史研究」という雑誌に発表され、そこには台湾の政治や歴史、社会問題だけではなく、松永正義さんや陳正醒さんによる台湾文学に関する論文も掲載されていた。戦後の台湾文学研究の空白がこうして埋められ始めたのである。

一方、中国大陸では改革開放政策の実施にともなって、1979年後半くらいから台湾文学作品の紹介や研究成果が続々と公表されるようになった。私自身はそうした作品や香港出版の台湾文学作品に何となく目を通す程度であったが、1982年の訪台後はそれらを集中的に読み始め、とうとう所属する大学院の演習で学生たちといっしょに教材として使用することになった。

こうして84年には、ゼミの参加者を中心に小規模な訪台団を結成し、台北から高雄まで、ほぼ台湾を一周する文学の旅に出かけたのである。その時は台湾から来ていた二人の留学生たちによる全面的な協力と、かねてから連絡のあった陳映真氏の尽力によって、政治大学では尉天驄氏や李昂女士を初めとした多くの現地研究者、作家を交えた

シンポジウムをもったり、自立晚報社主催の座談会に、楊達氏や龍瑛宗氏のように今ではすでに故人となった旧植民地時代の作家、鍾肇政氏、黄春明氏、王禎和氏（故人）、七等生氏など当時の台湾文壇を代表する作家たちが臨席されるようなこともあった。また、高雄でも柯旗化氏（故人）や葉石濤氏、楊青矗氏、鄭炯明氏など南方在住の現役作家がほとんどそろって懇談会が実現した。その前年に開設されたばかりの鍾理和記念館を笠山に訪ね、昨年永眠された理和夫人やご子息の作家鍾鉄民氏たちにもお会いした。この旅の成果は後に「中国研究月報」で台湾文学特集としてまとめることになる。だが、いいことづくめではなかった。

高雄での懇談会が終わった後、留学生の一人で、その恩師鍾肇政氏との連絡役を初めとして旅全体のプランを組んでくれた莊隆福君（故人）が、真っ青な顔色で私の宿へやってきた。彼の自宅に現地警察から調査が入ったというのである。また、もう一人の協力者であった林君も、彼が宿泊していたホテルの部屋から「共匪」のドラが発見されたという名目で自宅に警察からの追求が始まっていた。二人の留学生はもう日本に戻れないだけでなく、場合によっては逮捕されるかも知れないというのである。現地ではなばなく報道された旅の内容は、すべて当局の禁忌に触れていたのである。

私たちが出会った作家の多くは、かつて二二八事件によって投獄されたり、高雄事件で犯罪者とみなされた文学者であり、なかには陳映真氏のように、思想犯として緑島へ七年間も収監されたことのある人もいた。統一派と呼ばれる人もいれば台独派と見られる人もいたが、いずれにしても台湾文学者は当局にとってきわめて微妙な問題をはらむ厄介なやからであった。そういう人物と日本人との接触に協力している留学生は、当時の台湾当局にとって目障りな存在であったようだ。

私としては彼らを放置して帰国するわけにはいかない状況に追い込まれた。現地高雄の交流協会へ援助を求めに走ったり、関係者と相談するために、その後はゼミの学生たちと別れてしばらく単独行動をとることになった。結果的には二人の留学生に対するそれ以上の追求はなく、その後、二人とも日本の大学へ復帰することができるようになったのであるが、当時の台湾文学研究はことほどさように微妙な政治問題であることを痛感させられたのだった。

しかし、問題はそれで終わったわけではない。その後、今は故人となった小島朋之さんの紹介によって、「文化人派遣」という交流協会のプロジェクトで、私が訪台することになった時、訪問先や

訪問者に台湾文学関係者の氏名を記載したところ、直前になって交流協会からビザが出なくなったという連絡を受けた。どうも前の事件が尾を引いていたらしいのであるが、そのことがはっきり分かったのは、少したって台湾文学関係のシンポジウムで訪台ビザを申請した時である。

亜東関係協会（現在の台北経済文化交流処）の窓口では、すでに顔なじみの×氏から、普通なら申請後一週間目に受け取ることになるビザを、書類提出一時間後に出してあげましょうという、いかにも中国的な？対応を受け、いい気になって時間待ちをしていたところ、二時間以上たってから、彼が困惑した顔つきで処長に面会して欲しいといってきた。そして、処長氏によれば、私の名前が本国からのブラックリストに記載されているので、出先機関ではどうにもできないという鄭重な説明を受けることになる。

シンポジウムの開催の日は迫っていた。私には自分が危険人物だという自覚はなかったのですが、たまたま私が関係している財団法人孫中山記念会の関係で面識のあった外交部の某氏あてに台北へ電話したところ、彼も私がそんな大物ではないと認知してくれたため、その翌日には即刻ビザを出しますという協会事務所からの電話で一件は落着いた。以後、台湾行で問題の発生することは無くなったが、1980年代の前期、台湾文学研究には常にそうした危険がともなっていたことなど、今日の台湾研究隆盛の世相からは、おそらく想像もできない事態であろう。

ただ、すぐれた文学作品の創作と研究は、往々にして時代との緊張した対立関係の中で多くの名作を生み出している。現在の台湾文学者は、かつてとは比較にならないほどめぐる環境にあり、今ではほとんど自己規制を必要としない条件の下で自由に創作活動を行うことが可能になり、それを研究する私たちも、政治的な風向きに左右されることのないアカデミックな探求が行えるようになっていた。それはけっして悪いことではないが、しかし、80年代の台湾文学に向かい合った時のような緊張感がなくなったことは、研究がともすれば、重箱の底をつくような悪しきアカデミズムに陥る危険性も内包しているといえよう。

もっとも台湾文学研究は、大陸との関係では今もやはり「微妙」な問題である。それは私が台湾文学から「華文学」という領域へ手を広げた時に、今度は大陸でそのことを痛感させられるような事態に遭遇した時に痛感したことである。これについて詳しく触れる余裕はないので、拙編『境外の文化——環太平洋圏の華文学』(汲古書院)

の「序」などで少し触れたことがあることだけを追記させていただきたい。

台湾の文学と多言語 ー比較文学研究者の視点 西 成彦 (立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)

私の場合、ポーランド文学の研究を始めるために比較文学の門をくぐったという学問上の出発点が大いなのだと思う。国民文学間の比較や対照、影響関係・受容関係の検証というタイプの比較文学研究には、一貫して違和を感じてきた。比較文学は国民文学の擁護・補強ではない。

日本人比較文学者の系譜を戦前まで遡ると、旧台北帝大で西洋文学講座を担当した島田謹二というビッグネームにまで行き着くが、『華麗島文学志』に結実したその比較文学的な台湾文学研究は、その緻密さに心から敬意を払いたくはなるものの、私なりに物足りなさを感じる。時代的な制約を考えれば、比較の対象になっているヨーロッパ文学が英語圏・フランス語圏の「外地文学＝植民地文学」（それも現地人の欧米語使用を除く）にとどまっているのはやむをえないだろう。むしろ、気になるのは、「外地＝植民地」という空間における言語接触・言語隣接に対する感性の鈍さである。ポーランドの例を挙げれば、英文学やフランス文学のように威信を誇る諸文学に対する依存・傾倒はむろんとして、隣接諸言語（ユダヤ人のイディッシュ語やシンティ＝ロマの言語を含む）との言語接触を抜きにしたポーランド語環境というものはいえられない。また、分割列強の言語（ロシア語やドイツ語）の影響は、文化的な影響を超えるものであり（日本統治下の台湾における日本語と同じ）、さらにポーランドが大量の亡命者や移民を西ヨーロッパや南北アメリカに送り出したことを考え合わせると、移住地においてもまたポーランド語話者は、数々の言語接触を経験した。台湾の文学を比較文学的にとらえたいならば、ひとまず台湾の言語環境の歴史的変遷に注目しておかないことには、比較文学の名に値しないのではないのかというのが、ポーランド仕込みのわが特論である。

内地人が残した台湾文学の傑作だと島田謹二が見なす佐藤春夫の「女誠扇綺譚」を見てみよう。これをエドガー・アラン・ポーの「アッシャー家の崩壊」と比べるのはそもそも佐藤春夫自身がこれを強く意識していたようだから重要だし、これを英領オーストラリアの英語作家リチャードソン夫人や、フランス領インドシナのパルス作家

ジャン・マルケーと引き比べようとする発想方法は氣宇壮大、卓抜である。欲を言うとするれば、英語圏ならスティーヴンソン（中島敦が傾倒した）やコンラッド（「大東亜戦争」期に日本でも愛読された）、フランス語圏なら、『華麗島文学志』の文章が書かれた時代にまさに登場したアルジェリア生まれのフランス語作家カミュまで視野に入れられたら、未来の台湾文学像はいっそうはっきりと輪郭を浮かび上がらせることができただろう。それからラテンアメリカ文学についての知識が当時では乏しかった。

しかし、「女誠扇綺譚」を読む上で、私ならどうしてもおさえておきたい一点がある。台湾の多言語状況に対する佐藤春夫の鋭い観察眼である。

台湾で新聞社に勤めている話者と相棒の台湾知識人（世外民）は、漢文と日本語によって知的・言語的につながっているが、彼ら二人が踏みこんで行く安平禿頭港の廃屋では、台湾海峡をへだてた対岸、泉州の言葉がいきなり耳にとびこんでくる。いわゆる台湾語（閩南語）の一方言で、かつても今も台湾の言語状況を考える場合に無視できない言語である。「生蕃」居住地域を探訪した産物である「霧社」を書くにあたって、台湾原住民の言語について、その気配を敏感に察知した佐藤春夫は、「女誠扇綺譚」においても台湾の言語事情を作中にスリルとサスペンスをかもした要素としてとりこんでいる。「女誠扇」の謎を解くために町の富豪を訪ねていった主人公と世外民は、家の令嬢がいきなり「流暢」な日本語で話しかけてくるのに「思ひがけない」印象をいただくのだが、この場面も興味深い。こうした細部に佐藤春夫が試みた「台湾文学」の一趣向があった。

台湾に住む内地日本人は、なるほど日本語だけで事足りてしまう場合が少なくなかっただろう。しかし、いざ台湾社会に深く潜入しようと思うなら、いくつもの言語をかいくぐっていかなければならない。しかも、日本人と見るや、日本語で話しかけてくる台湾人の仮面の裏側までを見通す眼識が求められる。「女誠扇綺譚」を読んで私が舌を巻くのはそこである。仮に作品が一言語で書かれていようと、そこに描かれる言語的隣接関係に肉薄する意気込みがなければ「外地文学」の名に値しない。じっさい、西洋語で書かれた歴史に残る「外地文学」は、そうした「外地」の言語状況に何がしか敏感である（カミュの『異邦人』をその視点から読んでみてほしい）。

そして、このことは「光復」後、日本語にとって代わる形で公用語の地位についた北京語の圧倒的な優位構造の中でも、なお台湾文学の可能性を考えるとときに忘れてはならないことなのではない

だろうか。北京語と台湾語のダイグロシア状況は、多くの台湾（本省）人の日常でありつづけているし、客家系少数派や「原住民」系少数派にとって、多言語状況はなお錯綜しているだろう。作家一人一人がさまざまな言語の隣接状況をくぐりぬけて、北京語作家になるのである。この意味で、日本統治期から今日に至るまで、台湾文学は、文字言語の背後に異言語の影をひそかに宿した文学でありつづけている。アイルランドの英語文学や、カリブのクレオール言語使用地域のフランス語文学がそうであるように、台湾文学は一言語によつてのっぺりと一枚岩化された地域の文学にはない諸特徴をこれからも示すことになるはずである。

ポーランド文学の研究から始めた私は、しだいに、日本語文学が隣接諸言語を強く意識することになった明治から昭和の敗戦にかけての文学にひきつけられるようになった。台湾の日本語文学一般がいま面白くてたまらないし、アイヌ系の日本語文学や南北アメリカ移住地の日本語文学も見逃せない。「ポストコロニアル」が叫ばれるようになって中国語文学の中では台湾文学が、また日本でも少数派の文学が俄然注目を浴びるようになった背景には、かつてはたしかに各国・各民族の文学を鍛え上げてきたかもしれない19世紀的な「一言語・一文学イデオロギ」に対する訣別の意思が強くはたらいっているのではないだろうか。グローバリ化にともなう労働力の移動とともに、日本内地においても日本語の一人勝ち状況は、ふたたび足下から崩れてきている。さまざまな在日外国人の言語生活が、文学の現場にしびりこんできているのである。いつか日本文学と台湾文学の間に比較が可能になるとしたら、ひとつにはそういった見取図の中のことになるだろう。

それにしても台湾の「原住民」文学の勢いと豊かさには圧倒される（翻訳で読ませていただくだけののだが）。ひるがえって、アイヌ系日本語文学の線の細さが口惜しい。

台湾映画の「フランス映画化」をめぐる ーフランス文学研究者の視点 野崎 欽（東京大学人文社会系研究科准教授）

楊徳昌と侯孝賢。台湾映画という枠を超えて、20世紀後半以降の世界の映画で、もっとも素晴らしい監督たちだと思う。ぼくにとっては、東アジアに対して目を開かせてくれた点でも恩人である。その恩人の一人、楊徳昌は惜しくも07年、59歳の若さで亡くなってしまった。『一一』（02年、邦題『ヤンヤン 夏の思い出』）でカンヌ映画祭監督

賞を受賞し、さらなる大活躍を信じて新作を待ち続けたのに、『一一』が遺作となってしまうとは。楊徳昌ファンの期待を断ち切る、実につらい訃報だった。

『一一』の受賞直後、東京で楊徳昌に英語でインタビューする機会に恵まれた。現場では鬼に変身したとも聞かすが、ジーンズの似合う長身に優しい笑顔が、いかにも若々しかった。インタビューを終えて歓談しているとき、ふと彼が、配給会社の壁に貼られている『チャーリーズ・エンジェル』のポスターに目を留めた。そして笑顔を浮かべたまま、悔しそうにいったのである。

「『チャーリーズ・エンジェル』！ こんな映画にかける製作費をまわしてくれるなら、ずっとましな映画を二十本は撮ってやるのに」

国際的映画祭での受賞にもかかわらず、そして熱烈な信奉者の支持を集めているにもかかわらず、偉才がいまなお、製作費集めに頭を悩ませている。現実の一端を垣間見た気がして強く印象に残った。その後、『一一』が、台湾本国では結局、劇場公開されないままで終わったという寂しい話が伝わってきた。

一方の雄、侯孝賢にしても、近年はそれに似た状況だろう。『童年往時』(85年)や『恋恋風塵』

(87年)のころはともかく、90年代半ばからは、外国資本に支えられての映画製作が続いている。とりわけ熱心にバックアップしているのがフランスだ。『ミレニウム・マンボ』(01年)以降、侯孝賢の映画は説明的な語り口をいよいよ排し、李屏賓のしどけなく流動するカメラに乗って、空間を滑走していくようなスタイルを突き詰めている。そんな自由勝手な映画作りができるのも、フランスにおける侯孝賢の評価が圧倒的に高いためだ。

小津安二郎生誕百年を記念する作品『珈琲時光』

(04年)を日本で撮ったのち、侯孝賢は台湾の過去と現在を結ぶ美しいオムニバス作品『最好的時光』(05年、邦題『百年恋歌』)を、フランスの制作会社オセアン・フィルムズの協力を仰いで完成する。『ミレニウム・マンボ』に共同出資した会社だ。そして最新作『ホウ・シャオシェンのレッド・パレーン』(08)は全面的にフランスが出資し、ジュリエット・ピノシュを始めとするフランス人俳優を起用してパリで撮影した、完全なフランス映画である。これがまた、パリの現在の空気をこんなにヴィヴィッドに写し出した作品がほかにあるのかというくらい見事な傑作なのだ。

侯孝賢だけではない。90年代にデビューし、たちまち国際的に認められた蔡明亮も同じ道を辿っている。『洞』(98年、邦題『Hole』)以来、『黑眼圈』(06年、邦題『黒い眼のオペラ』)に至るまで、

彼が破天荒な作品を撮り続けられるのはひとえに、フランス人プロデューサーの理解と出資によるものだ。最新作『顔』は、ルーヴル美術館の全面的協力のもと、美術館内部で撮影中。出演者が凄い。ジャン＝ピエール・レオ、ファニー・アルダン、ナタリー・バイ。いにしえのフランソワ・トリュフォー監督の傑作群を彩った名優たちが名を連ねているのだ。

台湾映画のフランス化、などと冗談を言いたくなるような情勢ではないか。それにしてもいったいどうして、フランスはそこまで台湾の監督たちを厚遇するのか。フランス映画を見てきた人間にとって、それは決して不思議なことではない。要するに、トリュフォーやゴダールらが示した新しい映画の形を、力強く受けついでいるのが楊徳昌、侯孝賢であり、そして蔡明亮なのだ。スタジオから街中に出た、ロケ中心のスタイル。即興的演出を含む、なまなましくも鮮烈なリアリズムの追求。ワンシーン・ワンショットの長回しによる撮影。演劇的なせりふの拒否。そして、現代社会に対する真摯で批判的なまなざし。ヌーヴェルヴァーグの監督たちのそうした姿勢を、台湾ニューウェイヴは見事なまでに共有し、鋭鋭化している。そんな風に、フランス側からは見える。少なくとも、それがジャン＝ミシェル・フロドンのような、影響力ある批評家が近年、しきりに力説するところだ。ポスト・ヌーヴェルヴァーグの世代が思うように育たなかったフランスの映画製作者たちの目が、台湾に向くのも当然なのである。

だが、ふと疑念が兆さないわけではない。なるほど、現代台湾映画の達成は、商業映画の枠の外に映画を解き放とうとする、フランス的な映画美学にかなうもののように見える。だがそれはあくまで、フランス側の言い分である。上記の三人を始めとする台湾の新しい監督たちが切り開いてきた映画が、まったく独自の魅力を備えていることは言うまでもない。『牯嶺街少年殺人事件』(91年)の深い闇や、『南國再見、南國』(96年、邦題『憂鬱な樂園』)の身体的な運動性、そして『河』(97年)の歪んだ沈黙は、フランス映画をお手本に考えたなどという代物では毛頭ない。それらは監督たちの個性に根ざすと同時に、現代台湾社会のあり様と緊密に結びついた表現であるに違いない。

そのところを、ぜひとも台湾研究の専門家に、存分に解き明かしていただきたいのである。なぜ、二十年来、台湾からかくもオリジナルな映画表現が誕生してきたのか。その歴史的、社会的コンテクストはいかなるものなのか。ぼく自身は、06年に台北で開催された台日学術交流国際会議にお招きいただいた際、「現代台湾映画における寡黙さの

話法について」と題してアプローチを試みた。しかし所詮、素人の印象批評にすぎなかったことは自覚している。

楊徳昌、侯孝賢は映画史の中で、日本の小津安二郎や溝口健二にも匹敵する大きな存在として名を残すに違いない。その存在の秘密を、フランス映画批評経由ではなく、台湾文化研究の英知に照らして解明する余地は大いにあるはずだ。世界的なシネアストたちの、台湾人としてのアイデンティティを縦横に分析し、論じ尽くすような書物の出現を、日ごろ、フランス流批評に慣れきってしまった者として、心から待望する次第である。

台湾同時代演劇への関心

ー中国演劇研究者から

飯塚 容（中央大学文学部教授）

台湾演劇の研究といえば、布袋戲や歌仔戲に関するもの、そして最近では日本統治下の皇民化劇に関するものがあることを承知している。しかし、同時代の台湾演劇の研究や紹介は、かなり手薄ではないか。瀬戸宏氏の著作『中国演劇の二十世紀』（東方書店、1999年）には、戦後から90年代までの台湾演劇についての概説があるが、この内容を深める研究や受け継ぐ紹介は見当たらない。これは中国演劇研究者の怠慢だろう。自戒をこめてそう思う。

そもそも、台湾演劇の舞台上演に直接触れる機会がなかなかない。林懷民率いる「クラウドゲイト舞踊団」などはすでに3回来日公演を行っているが、戯曲や話劇となるとほとんど難しい。アジアの小劇場ネットワークを推進する東京のタイニイアリスが、一時期熱心に台湾の小劇場を招聘したが、「臨界点劇象録」や「シェイクスピアの妹たち劇団」のようなダンスパフォーマンス系が多く、台湾語劇団「金枝演社」などは例外的だった。頻繁に台湾まで出かけて公演を見るようなことをすればよいのだが、中国本土だけでつい精一杯になる。

そんな中で、台湾の現代劇に目を開かれた契機は、1996年に北京で始まった「華文戲劇節」だった。当初のネーミングは「中国戲劇交流」、中国語圏の話劇上演および話劇研究の成果を持ち寄るイベントで、98年の第2回（香港）以降、隔年開催が定着した。台北、マカオと続いたあと二巡目に入り、今年2月の台北で第7回を数える。96年に北京で、台湾からの参加作品に触れたときの衝撃については、以下のような一文を書いたことがある。

我々が最も注目し、また中国の人たちも最も強い関心を寄せていたのは、台湾・香港からの芝居である。そして結果的に観客の最も大きな拍手を得たのは、台湾緑光劇団の「領帶与高跟鞋（ネクタイとハイヒール）」だった。日本で言えば、ふるさときやらばんの「ユー・Ah! マイ・Sun 社員」あたりを思い浮かべてもらえばよい。そのテンポのよさ、歌と踊りの楽しさは際立っていた。サラリーマン生活の喜怒哀楽というテーマが北京の観客に百パーセント理解されたかどうかは疑問だが、かなりの共感を呼んだようだった。最近、ミュージカルに対する関心を強めている中国の演劇人にとっては、示唆に富む舞台であったろう。（『中国・台湾・香港の演劇交流』、『ユリイカ』1996年12月号）

そして続く98年には、台湾話劇のレベルの高さを決定的に思い知ることになった。少し長くなるが、当時の記録を引用させてもらいたい。

香港以外の地区からの参加では、台湾の表演工作坊による「我和我和他和他（私と私そして彼と彼）」が期待にたがわぬレベルの高い作品だった。演出は劇団の主宰者でもあるスタン・ライ（頼声川）。日本では、同名の芝居を自ら脚色・監督した映画『暗恋桃花源』で知られている。香港ではすでに数回の公演を行い、熱狂的なファンを獲得しているようだ。今回の作品は、香港での演劇祭を明らかに意識した内容となっていた。商談（合併交渉）のため香港へ向かう列車の中で、男（中国の企業グループの総裁）はもう一人の自分と出会う。一方、交渉相手である女（台湾の財閥の娘で、系列会社の社長）も飛行機の中でもう一人の自分と出会う。芝居の進行につれ、この男女が実はかつて香港に暮らしていた時に恋人同士だったこと、八九年（天安門事件の年）に交通事故に遭い、それぞれ意識を失って故郷に帰ってから性格が一変してしまったことが明らかになる。中国人、台湾人、双方の自我の分裂を描き（しかもその契機を八九年に設定している）、さらに香港を接点として両者（中国と台湾）の関係の修復、統一は可能かという問題まで考えさせる。隠喩に満ちた、奥の深い作品である。それでいて表面上はユーモアに溢れ、少しも政治臭さを感じさせない。俳優の演技や舞台美術なども、きわめて洗練されていた。（『香港の中国演劇祭』、『ユリイカ』1999年2月号）

その後、「華文戲劇節」が回を重ねるにつれて、台湾の話劇作品の観劇体験も少しずつ増え、また台湾の演劇研究者と知り合うこともできた。台湾大学の胡耀恆氏、中国文化大学の王士儀氏、台北芸術大学の于善祿氏、そして自身も劇作家である仏光大学の馬森氏、中国文化大学の黃美序氏などである。

以上のような状況の変化がありながら、いまだに台湾の同時代演劇について文章を書く機会がないのは、我ながら恥ずかしいことだ。実は数年前、ある研究チームでの課題として前述の表演工作坊、とりわけ彼らの「相声劇」シリーズを「究極の“語る”演劇」という角度から取り上げてみようと思画した。一石二鳥を狙って、大学院の授業でもそれらの脚本を読むことを始めて三年になる。

表演工作坊の「相声劇」は今世紀に入ってから、中国本土でも大変な人気を博している。しかし、日本では山口守氏による簡単な紹介がある（『ミレニウムを笑い飛ばせ』、『ユリイカ』2001年3月号）くらいで、ほとんど知られていない。早いところ形にしたいと思いながら、いたずらに時間が過ぎてしまった。今回、このニュースレターの原稿を引き受けたのは、そんな自分にハッパをかけるためでもあった。宣言したからには、もう逃げられない。覚悟を決めて台湾の同時代演劇に向き合ってみようと思っている。

取材経験から語る台湾 —ジャーナリストの視点から 辻田堅次郎（産経新聞外信部編集委員）

私が記者として初めて台湾を訪れたのは1985年11月だった。もう24年ほど前になる。当時、私は時事通信の香港特派員だった。台北に支局がなかったので、香港特派員が台湾情勢の報道を担当していた。

台湾を訪れるにあたって気になることが一つあった。中国で出版された辞書を持って行って大丈夫だろうか、ということだった。空港の手荷物検査で見つかり、面倒なことになったら困ると思い、携行をやめようかと何度か考えた。当時、台湾では大陸で出版された書籍の持ち込みは禁止されていたからだ。

結局、携行した。検査らしい検査も受けず、中国製の辞書の持ち込みは全く問題にならなかった。だが、私がこんなことで悩んだのも、国民党政府が中国の共産党政権と厳しく対立していたからだ。中国と台湾の間には強い緊張感があり、それが私の心にも緊張感をもたらしたのだった。

台北に到着し、台北駅に近いホテルに泊まったその夜、予想外の出来事があった。ホテルのボーイが私の部屋をこっそり訪ねてきたのだ。ボーイは「あなたは日本の記者だろう。一つ聞きたいことがある。国民党が台湾を大陸に売り渡そうとしているという話があるが、本当か」と小声でささやいた。その表情は真剣そのものだった。

もちろん、そんな話は聞いたことがない。私はそう答えたが、台湾の人々が国民党に抱く不信感の強さをまざまざと感じたものだった。それと同時に私が感じたのは、台湾の人々が台湾のメディアを信用していないということだ。当時は、国民党がメディアを厳しく統制していた。

当時の状況を振り返れば、まさに隔世の感がある。今では中国の出版物は街中に出回っている。中台間の緊張感は薄らぎ、台湾企業が大量に中国に進出、多数の台湾人が中台間を往来している。国民党はいったん下野し、厳しい報道統制も過去のものとなった。わずか20数年の間にこれほど変わるものなのか。台湾の変化の激しさには驚かざるを得ない。

台湾の政治情勢が大きく変化するきっかけとなったのは、蔣経国総統が晩年に始めた政治改革だろう。それ以前の台湾の政治体制は、国民党による事実上の一党独裁であり、中国と似たようなものだった。国民党政府は「共産中国」に対して自らを「自由中国」と呼んでいたが、野党の存在すら許さない体制であり、全く内実を伴っていなかった。

蔣総統の政治改革は1986年に動き出した。この動きについて当時、香港中文大学におられた翁松燃教授にお話をうかがったことがある。翁教授は「窮則変、変則通」という言葉で説明してくれた。

「窮すれば通ず」という言葉は知っていたが、「窮」と「通」の間に「変」が入る言い方は知らなかった。なるほど、うまい表現だと感心したものであった。国民党の支配体制が行き詰まったので、改革に動き出した、という意味だったと記憶している。

その後、1987年に戒厳令が解除され、大陸への親族訪問も解禁となった。蔣総統の死後、政治改革は李登輝総統に引き継がれ、1989年には台湾人の政党・民主進歩党が合法化され、議会の正常化も進められた。1996年には初の総統直接選挙も実施された。これにより、台湾は普通の民主主義体制に変貌した。

こうした政治体制の民主化だけでも大きな変化だったと言えるが、その過程で政権交代も実現した。民進党は合法化されたそのわずか11年後の

2000年の総統選挙で勝利を収め、国民党から政権を奪ってしまったのだ。

台湾の政治状況が蔣経国総統晩年の政治改革以降、堰を切ったように急激に変化したのには幾つか理由が挙げられよう。底流に、外省人の支配から脱却したいという本省人の強い願望があったと思われる。蔣総統の後任に本省人の李登輝氏が就任したことで政治改革が急進展したという側面もあっただろう。

だが、対岸の中国が大きく変化したことも見逃せない。1970年代末に権力を握った鄧小平の下で台湾政策の重心が「武力解放」から「平和統一」に変わり、経済面では市場原理が幅を利かすようになり、政治面では社会主義イデオロギーが急速に色あせていった。台湾としても、中国に対して緊張感を維持する必要性が薄らいだのだった。

「大陸と台湾の関係は『互動』だ」——かつて台湾の記者から聞いた言葉を思い出す。台湾の変化は大陸の変化を促し、大陸の変化は台湾の変化を促す、という意味だ。その結果、現在のような中台関係が生まれた。依然として「不統不独」の状況が続いているが、人的、物的交流は盛んになった。

では、中台関係は今後どうなるのか。20数年前に、台湾が、そして中台関係が現在のようになるなど、私には全く予想できなかった。だから、今後の中台関係の見通しを述べる資格はないかもしれないが、あえて言わせていただければ、「不統不独」の状態が続くのではないか、ということだ。

台湾の総統に外省人がなろうが、国民党が政権を握ろうが、台湾の政府は世論を無視して中国との統一を進めることなどできない。蔣総統が始め、李総統が推進した政治改革、すなわち政治の民主化によって、そういう政治体制になってしまったからだ。

ならば、台湾の世論が、中国との統一を支持する時代が来るのか。現時点では、そういう時代が来るとは予想しにくい。それは、中国と台湾のどちらが住みやすいかを考えれば明らかだろう。中国にしても、強引に台湾を統一するわけにはいかない。そんなことをしたら、かつての228事件のように、台湾の人々の心に深い憎しみを植えつけるだけだからだ。

しかし、だからといって、中台統一はある程度ないと断言する勇気は私にはない。再び「窮則変」という事態になるかもしれない。例えば、台湾経済が激しく落ち込んだりした場合である。そんなとき、中国政治の民主化がかなり進展していれば、台湾の方から中国の懷に飛び込んでいく可能性もないとは言いきれない。

では、中台統一が台湾の人々の幸せにつながるのか。それは、そのときの台湾、中国の状況を見なければ何とも言えない。ただ一つ中台統一について私が言えるとするれば、統一が実現すれば、日本の安全保障にとって間違いなく脅威が増大する、ということだ。

国際交流の現場から見た「台湾」

一日台交流の視点から

馬場克樹

(財団法人交流協会台北事務所文化室長)

二年前に台湾に赴任して驚いたことがあります。筆者が初めて会う台湾の方に自己紹介をすると、概ね四十代以上の台湾の方であればほぼ間違いなく筆者の姓を知っていて、判で押したように空手チョップの仕草をしながら、「あのプロレスの馬場と猪木の『馬場』ですね。」と述べ、親しげな笑顔を筆者に向けてくれるのでした。

家庭内では「日本語世代」である彼らの両親から、様々な形で日本語や日本文化についての薫陶を受けてきたことも間違いのないと思われますが、それにしても三十数年以上も前に、当時少年だった筆者と時を同じくして、本当に多くの台湾の人たちが茶の間で同じプロレス番組興じていたという事実には、一種の驚きと深い感慨を禁じ得ません。いったい公共の電波で日本語の放送を禁止されていた時代に、なにゆえ台湾の人々はプロレスを観戦することが可能だったのでしょうか。宜蘭出身の方はテレビの受信アンテナを日本の方角に向けて日本の放送を傍受していたと言い、台南出身の別の方は台湾の公共放送でも娯楽番組の枠で普通に流れていたように記憶していると語ってくれました。それだけではありません。「第四チャンネル」という言葉をご存知でしょうか。プロレス全盛時代の当時は公共放送のチャンネルがわずか三つあるだけでした。しかしながら、1980年代に入ってケーブルテレビが普及するようになると、暗黙の了解、もしくは半ば公然と裏番組が流されるようになり、そこで日本のプロレス番組の視聴も可能だったそうです。これが「第四チャンネル」です。現在の台湾では、ケーブルテレビで百チャンネル以上もあり、隔絶の感はありませんが、もしかするとこの「第四チャンネル」は、台湾の方々の日本に対する親近感を醸成していく上での陰の立て役者だったのかもしれない。

ところで、昨年のデータでは年間139万人もの台湾の方が日本を訪れており、日本を訪れる外国人としては韓国に次いで第二位の数字となっています。

ます。昨年2月の台湾シンクタンクの調査によれば、日本、米国、韓国、中国の4か国のうち「最も親しみを感じる国」として40%近くの方が日本と答えており、これは第二位の米国の25%を大きく引き離し第一位の数字となっています。このような具体的な数字からも台湾の方の日本に対する関心、親近感は裏付けられますが、だからといって現在のこの台湾の親日的土壌が、20年後、30年後も同様に続いているという保証はどこにもないということを、私たちは認識しておかなければならないと思います。

台湾における日本理解の牽引役を果たしてきた「日本語世代」の方々は、今年で満76歳以上となります。将来を見据えた次の世代の交流、すなわち青少年の交流について、本腰を据えて取り組まなければならない時期に、今来ていると思われまます。幸い、現代の台湾の青少年は日本のサブカルチャーに大変な関心を持ってくれています。しかしながら、台湾の、特に若い世代の方々が、日本の社会の仕組みや日本人の価値観、思考様式、行動様式といったものがどのような文化的歴史的背景や社会システムの下、現在の形に醸成されていたのか理解していただいているのだろうかと問われれば、甚だ心許ない気が致します。このことは、同じように多くの日本人の台湾に対する理解についても言えるのではないかと思います。一例になりますが、ある台湾の歴史学者が日本の大学で講義をした際に、かつて日本が台湾を統治した事実すら知らなかった学生が大半だったと嘆いていらっしゃいました。

さらにより深いレベルでの日本理解を進めていこうとすれば、台湾においてアカデミックな切り口で日本のことを自在に語れる人材、すなわちジャパノロジストが意外と少ないことに気が付くはずです。台湾の大学で唯一の日本研究センターを名乗っていた淡江大学日本研究センターも、間もなく同大学東南アジアセンターと合併して東アジアセンターという名称となり、台湾の大学から「日本研究センター」の看板を掲げるところが無くなってしまいうことも、台湾における日本研究が置かれている立場を象徴的に物語っているような気がします。台湾の各大学、研究機関を見渡せば、日本で博士号を修めた研究者を中心に、日本語、日本文学、日本史等の人文科学分野の人材は、他の世界の国々と比較しても大変充実しているとの印象を筆者は持っていますが、社会学、政治学、経済学、法学、国際関係等いわゆる社会科学系には、日本を専門とするジャパノロジストはそれぞれの学部で埋没していて数えるほどしか見当たらず、欧米で博士号を取得した研究者でほとんどのポス

トが占められています。また、学術書、学術雑誌といった研究リソースの不備も深刻で、かつて日本の大学で学位を取得した研究者も、インターネットで日本の情報を収集するのが精一杯であり、現在の日本の学会の最新動向に追いついていけないという現状も珍しくありません。

今年は台湾当局が「台日特別パートナーシップ促進年」を謳っていますが、それに呼応しつつ、将来を見据えたより強固な日台関係を築いていくための日本研究支援の取り組みが急務ではないかと筆者は考えます。たとえば、台湾で中心的役割を果たす研究機関に日本研究の講座を設置するよう働きかけたり、若手の台湾の日本研究者を育成するシステムを構築したり、日台双方が共同で何らかの対策を検討していく端緒を作っていくことが必要でしょう。また、それと同時に、既に台湾で活躍している社会科学系の研究者に、日本も地域研究の対象として視野に入れてもらえるような枠組みをどのように作っていくかも当面の課題となると考えます。

筆者の所属する財団法人交流協会でも、以上のような目標を掲げながら台湾の日本研究を積極的に支援していきたいと考えており、本紙面をお借りして日本台湾学会の皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げる次第です。

中国の奇跡と東アジアの奇跡 —中国経済研究者から見た 台湾経済研究者への期待— 上原一慶（大阪商業大学経済学部教授、 京都大学名誉教授）

このニュースレターを書く前に、日本台湾学会10周年記念シンポジウム基調報告を拝読し、正直のところ大きな驚きを禁じ得なかった。この10年間に会員数の倍増だけではなく、国際交流の展開や、多くの成果を出されていること、そして分厚い研究蓄積がなされていることにである。こうした学会の構成メンバーに、十分な研究蓄積のない筆者が台湾経済研究に何か語ることはおこがましい限りである。そこでここでは中国経済を研究している立場から、台湾経済研究者に期待したいことを記すことでお許しいただきたい。

標題の「中国の奇跡」という言葉はおそらく、現在、世界銀行チーフエコノミストを務める林毅夫と蔡昉、李周3人の共著『中国的奇跡：発展戦略と経済改革』上海三聯書店・上海人民出版社、1994年（邦訳：渡辺利夫〔監訳〕杜進〔訳〕『中国の経済発展』日本評論社、1997年）が最初であ

ろう。そして、改革開放 30 周年を迎えた昨年末から新聞等で再び取り上げられている（例えば革新的という評判の『南方周末』は 2008 年 2 月以降、「中国の奇跡」をめぐる識者の見解の連載を組んでいる）。改革開放 30 周年を迎え、30 年の長期にわたる高度経済成長を続けた「奇跡」を総括し、今後も持続できる道筋を提案しようとする狙いである。

「中国の奇跡」という言葉をみたとき、筆者は 1991 年にタイで開催された世界銀行年次総会で発表された 1965 年から 90 年にかけて持続した急成長を対象にしていた「東アジアの奇跡」を思い出した。「中国の奇跡」は、持続期間からみて、この世界銀行レポートを意識しているのかと思ったからであるが、そうではないようである。例えば、『南方週末』連載のトップを飾った秦暉「“中国奇跡”の形成と未来—改革三十年之我見」（2008 年 2 月 21 日）は、旧ソ連・東欧の急進的改革が持続的経済成長ではなく、経済困難に陥ったことと対比し、中国は、改革開放 30 年にわたって長期高度成長を続けたこと、それが「中国の奇跡」であるとし、その要因を改革開放以前の経済構造、経済システム等にまでわたって検討している。こうした見解は大変刺激的であるが、気になったことがある。それは世界的公正さの欠如の増大を指摘しながらも、なお「中国の奇跡」を語っているからである。「東アジアの奇跡」が指摘した重要なポイントが十分考慮されていないような気がしたからである。

世界銀行レポートは、東アジアの経済的奇跡の際立った特徴として「公平を伴う急成長」（世界銀行『東アジアの奇跡—経済成長と政府の役割—』東洋経済新報社、1994 年、7 頁）を指摘し、「高いパフォーマンスを示す東アジア諸国（High-Performing Asian Economies: HPAEs）は、高度成長と不平等度の減少の両者を持つ唯一の国々である。さらに、もっとも急速に成長した東アジア諸国である日本と『4 匹の虎』（香港、韓国、シンガポール、台湾）は、もっとも公平な国である」（2 頁）と強調していた。

こうした「東アジアの奇跡」と比べると、「中国の奇跡」はかなり異なる。

例えば、世界銀行の『世界発展報告 2006』の推計によると、中国の改革開放以前は 0.16 と極めて平等であることを示していたジニ係数が、2006 年には 0.47 に拡大したとされ、「ジニ係数から見て、中国はすでに急速に世界上、貧富の格差が最大の国家の一つとなった」と評価されるに到っている。また、国家発展改革委経済研究所俸給設計センター主任徐振斌（『中華工商時報』06・10・24）に

よると、こうした格差拡大は、中下階層が大多数を占め、中間階層が必ずしも明確でない、そして上部が非常に小さい“タマネギ型”社会階層構造を作り出しているという。更に市場経済化に伴い非正規就業も増大している。今日では都市部就業者総数の約 50%を超すに到っている（但し、中国の非正規就業には、市場の発達が未成熟な伝統経済から発達した市場経済への近代化過程で形成される正規部門外の都市雑業層と正規部門の正規就業の削減、解体の代替としての非正規就業が含まれる。日本の場合は後者の概念で、バブル経済崩壊後急速に増え、2008 年 1～3 月期平均データでは 34.0%を記録した（『労働経済白書』平成 20 年版、27 頁）。

以上の点を考慮すると、中国の「奇跡」というのは、実は高度成長の「持続」という点を除けば、高度成長と不平等度の拡大を持つ、歴史的経験のある道を歩みつつあるように思われる。その意味では今後の経済発展は今大きな曲がり角に差し掛かっているといえるだろう。もちろんこうした問題点は見過ごされているわけではない。たとえば国務院発展研究センター李佐軍は、不公平の拡大は「社会の安定と調和に悪影響を与えて、人々の改革に対する評価を落している。これは中国の改革から得られる一つの重要な教訓である。そのため、改革は必ず公平と効率両方に配慮しなければならない」（「中国の改革から学ぶべきものとは」

『中国経済時報』：『中国経済新論』2008 年 12 月 11 日、転載より）と述べている。しかし、「公平と効率両方に配慮すること矛盾なしに両立させることは困難であろう。両者が妥協、矛盾をくり返ししながら、大なり小なり一定の割合で同時に含まれるさまざまな組み合わせの中から、できる限りより合理的で、より有益な組み合わせを選択するようなシステムが必要ではないかと思われる。

以上の点を考えると、「東アジアの奇跡」諸国、特に台湾と韓国は、「公平を伴う急成長」をなし遂げただけでなく、教育水準の向上や中産階級の形成をもたらし、それを通じて民主主義を促した経験は貴重である。その内、台湾での 1996 年の総統直接選挙による民意を反映した政権が誕生して以来、2000 年、2008 年と政権交代が行われたことは、注目に値するに思われる。

台湾の「奇跡」は中国の将来を展望する上で、中国政治・経済研究者にとって重要な研究課題である。台湾の「奇跡」と中国の「奇跡」の差異はどこにあるのか、それは政策の差異によるものか、台湾の「公平を伴う急成長」を中国でどこまで適用可能か等、台湾研究者の研究成果に期待するところ大である。

＜台湾の研究者から＞

続いて、台湾研究の現状についてのご寄稿です。

台湾研究の新しい風

陳培豊

(台湾・中央研究院台湾史研究所助研究員)

台湾研究は、2000 年から昨年（2008 年）まで、つまり民進党の政権下の台湾で大きな変化を遂げた。学術的な厳密な定義を欠いたイデオロギー重視の風潮に乗って生まれた「学問」、「台湾学」や「国学」といった主張や刊行物が多く出現しただけでなく、台湾主体性に立脚した台湾文学、郷土研究所、原住民研究所、客家研究所といった専門学科が大学内に多数新設された。これらの現象は、民進党の本土化政策の成果であり、一部本土派人士の願いが実現したともいえるが、ただ一つの国において、短期間の間に突然又大量にこれらの新学科が誕生したことは、教育現場における教授や学生にとっては大きなチャレンジであり、また負担ともなっている。民進党 8 年間の執政の台湾研究に対する功罪は、新学科の成立の速度や数量だけでは推し量れないものがある。

1980 年代に民主化運動の声が高まるにつれ、台湾人の自らの土地に対する関心も増していく。その土地に住む人、事件、物に関する研究は、当時においても現在においても多くの知識人の関心の的となった。「本土」に関心を向けるという現象は、台湾研究をすぐにメジャーな学問へと押し上げ、様々な研究テーマが発見されまた少なくない人材も育てた。とはいえ台湾研究という分野は、戦後国民党の長期にわたる政権下では一種のタブーであった。かつての台湾の大学に台湾史という学問領域が存在せず、またその後台湾史が大学に登場した後も中国史の下でのみその研究が許されていたということからも、国民党執政下での台湾研究の地位が想像できるだろう。そのため 2000 年以降台湾研究が突然「復権」、「解禁」されたことは喜ぶべきことではあるが、純粋な学術研究という点から見れば、その変化は一人の虚弱体質な人間に対して突然マラソン大会への参加を要求するようなものであった。

台湾研究の流れ

このような歩みの中で、台湾研究は意外な変化や成長を見せる。数年来最も多く新設された台湾文学という学科を例にとって見てみよう。

2000 年前後に台湾文学関連学科が大学でスタートすると、以上のような現実的な考慮によって、多元的、立体的、領域横断的また対話の方向で学問の展開がなされていった。指導者確保では、台湾文学という学科が元来存在していなかったため、学校によっては文学専攻以外の各分野の研究者を台湾文学科の教師陣営に加えた。新たな人材の加入によって、従来の作家論、作品論だけでなく、言語、文化、思想、メディア、読者、文体、広告、標語、さらに演劇、歌謡、講談物といった音声テキストも台湾文学における重要な分野となった。台湾文学などの新興学科と既存の台湾史研究との違いは、研究対象が文学か歴史かということのほかに、研究手法や方法論、態度にあるようである。

2005 年に成功大学台湾文学科によって主催された「跨領域的台湾文学研究學術研討会」は、エポックを画すシンポジウムと位置づけられよう。当時の台湾人文社会科学の各分野における優秀な研究者を一堂に集めて行われたこのシンポジウムは、事実上学术界に対して「台湾文学は領域横断（跨領域）の台湾研究機関である」と宣言したのである。それは総合的な研究手法と開放的な態度で、歴史学、社会学、政治学、文化人類学、カルチュラル・スタディーズといった各分野の研究者の加入を歓迎するものであった。このシンポジウムの成功は台湾研究の脱皮—伝統的な歴史学の手法に導かれた台湾史及び台湾研究から、新たな次元へと進化—を象徴している。

台湾文学をはじめとする新学科の成立は、台湾研究の大学におけるメジャー化の進行だけでなく、新たな研究方法や姿勢の出現も物語っている。例えば、中興大学はグローバル化と理論重視を標榜し、清華大学は台湾文学を満洲、朝鮮といった地域との関係の中で位置づけ、政治大学は東アジアという枠組みを重視している。明らかなことに、これらの大学の台湾研究の定義は、すでにこの島を飛び出し、台湾という研究対象をより大きな関連テーマの中においてそこに意義を与えようとするものである。研究範囲の多元化、拡大は必然的に研究テーマの活性化を促し、問題意識の提起が重視されるようになる。

台湾研究の新しい風

昨年、中央研究院台湾研究所で行われた『台湾史研究的回顧与展望』に、新規の台湾文学と伝統的な台湾史研究の研究手法や問題意識提起に対する違いをはっきりと見てとることができる。2007 年の一年間に台湾で発表された台湾関係研究の論文のうち、文学類の論文は総数 213 編で、全ての台湾研究論文 1041 篇の 20.46% を占める。その

検討報告の中で、台湾文学はテーマ、研究動機や方法、特性、その方向性などが報告の主軸となっていたのに対し、台湾史研究は、ほぼ例外なく台湾史研究論文の中の資料考証の正確さがその検討の対象となっていた。台湾史研究が資料発掘の有無、どれだけの資料を提示しているかを歴史の真相を求める判断の基準としているのに対し、台湾文学研究が重視するのは問題意識、構造、方法や歴史的事件を理解する上での観点を提起しているかであった。論文とは論点、論述及び結論から成り立っており、歴史研究は量的思考をその基礎とはするが、史料が直接その歴史研究となるわけではない。史料は必ず問題意識、方法、弁証ロジック、視点及び構造の下ではじめて意味を持つものである。

教師、学生の相互交流、研究テーマの類似性によって、台湾文学等新学科の展開は、従来の台湾史研究にも影響を与えている。一部の台湾史研究者は依然として純正の歴史研究が他の人文社会科学とは異なることを強調し、自身もしくはその学生が一見華やかではあるが内実を伴わないこともある新たな台湾研究の影響を受けることを好まない。とはいえ、その影響は徐々に既存の台湾史研究の中にも浸透しつつある。

台湾史研究は民進党執政後に急速且つ大量に大学内に進出したが、それに求められたものは当然ながら、体制内における学術の構築を通して台湾ナショナリズムのディスコースを強化し、本土政権の理論的基礎を確立することであった。だが皮肉なことに、新学科の設立によって、台湾研究の対象テーマはかえって以前ほど「政治」的ではなくなる。1980—90年代における政治社会運動から起こった植民者への抵抗や、台湾ナショナリズムの強調を題目とする研究は、新学科成立後目立った増加を見せていない。研究テーマの活性化、多元化によって、台湾庶民生活史、具体的には料理食物、風呂、身体衛生、演歌、広告、日記、スポーツといった新しい研究テーマが次々と生み出されていった。だが、これらの研究は一見政治とは無関係に見えるが、台湾ナショナリズムという台湾社会を反映する最も大きなエネルギーにかかわるテーマに回帰する可能性も秘めている。つまり2000年以降の台湾史研究と台湾ナショナリズムの関係は、知識人を主体とする政治、社会運動から庶民生活史へと転換する傾向を有しているのである。

2008年に中央研究院が学術的競争力を有する「重要研究成果」論文に選出したのは、演歌をテーマとする研究であった。重層的な植民地統治下の台湾社会に流行した日本語、台湾語、国語（中

国語）という三種の言語による演歌を通して、重層的植民下における複雑な台湾エスニシティ、文化、政治、社会問題を描き出し、台湾ナショナリズムの姿を説明することを試みている。大衆娯楽を通じて台湾社会、政治問題を説くという方法は、横断領域の台湾研究の代表的な実例といえる。そして類同の研究の出現は、台湾研究が民進党執政下で知らず知らずのうちに芽生えた意外な収穫といえるのではないか、その答えには今しばらくの観察を必要とする。

台湾史教育の経験と方法

陳鴻圖（台湾・国立東華大学歴史学系副教授）

はじめに

台湾の大学教育制度における台湾史教育をめぐって書いて欲しいとの要望があったのだが、まだ教歴が浅い身としてはとてもそのようなものは書けないため、「期待」と「反省」を込めた「経験」を綴ってみることとする。

台湾では、大学の「台湾史」科目の開設という大きな「想像」を働かせなければならなかった。なぜなら、同科目は政治と現実の影響から免れがたい上に、中国史を中心とする歴史学部の中で生きていく必要があったからである。「想像」とは？いくつかの現状を思い浮かべて欲しい。例えば、大学にはなぜ「台湾史研究所」があるのか？「台湾史」は「国史」なのか？「台湾史」は必修科目か？行政院国家科学研究委員会の研究プロジェクト申請では、台湾史に関するものの採用比率はどれほどか？大学の入試科目では台湾史の問題はどれくらいの割合を占めているのか？

ちなみに、筆者は1997年より輔仁大学進修部で台湾史科目を兼任し、2001年以後は東華大学歴史学科で台湾史の専任となり、この12年間で「台湾通史」、「台湾社会経済史」など10種類以上の台湾史の授業を担当してきた。開講対象は学部生および大学院修士課程、単位は2～6で、必修・選択ともにあった。

方法と心構え

筆者の教育理念は経験や学生の入れ替わりなどとともに変化してきたが、「教師」と「授業」についての考え方は、大まかに言えば「教師は学生の要望に応えなければならない、授業上・学業上の如何にかかわらず、学生に自信を付けさせ、学生を応援してやらなければならない」というものである。筆者にとって、教師とは「導く者」であ

り、学生を学問の世界と現代社会へと誘う存在なのである。

台湾史科目の最大の特徴は「生まれ育った土地との緊密な結びつき」と言えよう。これはつまり、まずは「生まれ育った土地」を理解し、さらにこれを愛し慈しまなければならないということである。こうした前提の下で、大学院では院生が研究の方向性と論文執筆能力とを確立する手助けが求められており、また、大学の専門科目では、知識を得るだけでなく基礎力と探求能力の育成が重視され、教養科目では「この土地」を知り慈しむことが求められるのである。これらの指導方法とその効果をまとめると以下の通りである。

1. 教師自らが学生のお手本となり、学生に関心を持ち、学生を尊重する

筆者の勤務校がある花蓮では、人生経験の少ない学生にとって教師はしばしば最大の心の支えとなることから、授業以外の時間にもコミュニケーションを多く取るようにしている。学生との信頼関係を築き、師であると同時に友でもあるという関係になることが、学生の学習成果に好影響を及ぼし、また学生の状況も把握しやすくなる。

2. 学生が良く知っている事柄を利用して学習意欲を引き出す

学生の学習意欲を引き出すために、例えば「台湾の歴史と文化」や「台湾通史」の授業では、最初の講義の際、自己紹介とともに「ふるさと紹介」をさせている。学生は長い間住んでいた土地について知らなさすぎることに驚き、これが刺激となって故郷への理解を深めようとする。また、授業の中で学生の故郷がよく登場するが、学生に補足説明をさせるなどして、学生の興味や自信につながるようにしている。

3. 学生が関心を持っている課題を討論させる

台湾史の授業では、「省籍アイデンティティー」や「族群関係」といった、学生が関心を持っていて議論が白熱するテーマが多くある。こうしたテーマは一般的にマスコミのミスリードの影響を受けやすいことから、学生には十分討論した後、歴史的文脈から分析を加えるよう指導している。また、補充資料を配布したり、学生に総統選挙の当選者予想を行わせたりして、学生の社会的関心や学習意欲を高めるようにしている。

4. 校外学習による地域や社会に対する関心の育成

サイクリングでの日帰り史跡巡りや「台東野外見学2日間の旅」といった旅行などの校外学習を行うことにより、学生が地域や社会、台湾史への関心を高めるようにしている。

5. 映像を使って授業内容を活性化

授業で映像資料を多く利用するようにしているが、学生には映像を鑑賞させるだけでなく、感想文を書かせることにより、さらなる学習効果が期待できる。

6. 報告発表は負担ではなく資産

筆者は、授業での報告発表は異なる出自を持つ学生にとってとても有益であると考えている。教養科目では、学生の負担が大きくなり過ぎないように4～5人のグループ報告形式を採用し、学生に花蓮や東台湾に関連するテーマを選択させた上で、自ら資料収集させ、また授業発表の際は役割分担を明確にさせるようにしている。こうすることで、学生は報告準備の印象が強く残るとともに、花蓮で勉強していることを実感することができよう。

専門科目では、前期はここ10年間に出版された台湾史関連書籍の書評発表をさせ、書評の形式や書き方を学ばせている。後期は「族譜」を報告させることにより、もっとも身近な歴史に触れてもらい、学生の歴史に対する興味をかき立てるとともに、歴史学の方法論を学ばせている。

7. 勉強会を催し、学生の大学院進学を支援

ここ2年間、大学に経費申請をして、大学院に合格した4年生を招いて勉強会を開いている（筆者も時々差し入れを持って参加）。また、大学院への進学に興味を有する学生に対しても、勉強会を催すことを勧めたり研究計画の執筆に協力したりしている。

おわりに一反省点

台湾史の教鞭を執ってきたこの12年間は、筆者にとってもとても楽しいものであったが、これは学生からの大きな反響があればこそであり、また、筆者の熱意がいつ冷めてしまうかもしれない。自身の指導経験・方法を振り返りつつ、指導上の困難を「反省点」として挙げて本稿の結びとした。

A. 言語の問題：「台湾語」の単語の意味が外国人留学生や華僑留学生にうまく伝わらないことがあったり、語学力不足のために日本語や英語といった外国語文献を十分活用できず、中国語文献の利用が中心となってしまった。

B. 講義形式授業の問題：授業をコントロールしやすいことなどから、筆者は伝統的な講義形式を好んで用いるが、「一方通行」であることや、学生にじっくり考えさせたり討論させたりする時間が思うように取れないこと、映像資料といった文字以外の資料を利用しにくいことなどが欠点として挙げられよう。

C. 授業負担の問題：現在、台湾史関連の教学経費補助は多くあるが、使い道に融通が利かない上に即効的な成果が求められることから、筆者はこれらの申請にあまり気が進まず、多くの授業で自腹を切っている。また、近年は半期 10 単位の授業を担当しており、こうした負担が原因で授業の質が落ちるのではないかと感じることもある。

(翻訳：竹茂敦・法政大学)

かの時代の再臨という予感に悩まされて 呉豪人（台湾・輔仁大学法律学系副教授）

これから日本台湾学会の皆様にご報告するお話の内容が夢かウツツかは、皆様のご判断にお任せします。

2008 年 12 月 4 日木曜日、快晴。その日、台湾の中央研究院にて「台湾史研究の回顧と展望」と題付けられた学会が開催されました。テーマ通り、この学会の主たる目的は「2007 年の台湾史に関する研究成果を社会科学のあらゆる分野から網羅的に省みて、そして今後の展開や研究のあり方に探りを入れよう」というゴモットモなものでした。恒例に沿う催事とはいえ、やはり年に一度の盛会であるため、当日集まった参加者達は 200 人弱、いわば台湾人の台湾史研究者（クドイなあ）精鋭陣の総出といっても誇張ではないでしょう。

平たく言えば祭りです。形式からしても本質からしても、由緒正しい（と思われた、思わせた、思わされた）一つのディシプリンとしては欠かさない祭典に違いありません。

本来ならね。

でも 2008 年のこの祭典の雰囲気は少々違います。

最初は至ってオーソドックスな会議ぶりで順調に進んでいた。少なくとも第一セッションの「史料類／経済類」の進行はそうでした。しかし第二セッションの「政治類」に入るや否や、どこかただならぬ緊張感と不安感が会場に漂いはじめた。報告者の一人の陳翠蓮先生（政治大学台湾史研究所教授）は報告の冒頭にいきなり「歴史が原始的材料として民族主義者、種族主義者や原理主義者に利用されることは、ちょうどケシがヘロインの原料として使われたことと同じだ」という、エリック・ホブスバウムの言葉を引用し、「民族主義者と自任する歴史学者の中にはよき歴史学者を務めた例はない」と断言した。するとコメンテーターの呉観人先生（中央研究院台湾史研究所助研究員）はなぜか「それならマルクス主義者と自任する歴史学者らだって同じだ」と「ホブスバウムの左翼

の思い込み」を批判し、さらに「私は民族主義者と自任する歴史学者だ。両者には矛盾なんぞおらん」と激しい応酬を見せました。反応過剰というほどに。

陳先生がご報告の中で繰り返して論じていることはただ一つ：「歴史家は政治的熱狂者であってはならぬ」ということです。しかも同報告の中では、陳先生もまた「権力への抵抗から権力を脱構築することへ」を 2007 年の台湾政治史研究の特筆すべき成果として挙げています。彼女のいう「民族主義に走った歴史学者」のほとんどが「統一派」と目された人々ばかりです。むしろ民族主義、現実的政治を超越しうる真の歴史家の域に達した人々、あるいはそれを目指そうと励んでいる人々といえ、その場にいる「われわれ」に他ならないはず。私に言わせれば、そのような発言とそれに隠されたさまざまな錯綜とした感情は、いかにも「台湾的」なものであり、「台湾人でない」台湾史研究者——とくにキャッカン、コウセイ、レイセイにと台湾史研究に取り組む日本人の研究者ならば、おそらくこの類の発言を看過するでしょう。それもそのはず。そんな集団的な病気みたいな心理的重荷を背負う必要もない自由なる人間にとって、陳先生のいうことは冗句にきこえるでしょう。

しかし陳先生のいう「われわれ」の場合はそうでない。戒厳令解除されて以来はや 20 年、「われわれ」は個人的感情を抑え、ひたすら厳密な学問のルールに則って、加害者が捏造した党国イデオロギー的な歴史ディスクールを完膚なき叩きつぶしたぞ。と同時に己の被害者意識をもきれいに振り落としたぞ。それはまさに台湾史研究家の自立宣言です。

正論だ、はっきりいって。

それならばなぜ、呉観人先生はそのような正論をうけつかなかったのか。呉観人先生のみならず、次の報告者の薛化元先生も異議申立てました。薛先生のご報告のコメンテーターを務めた私はこのただならぬ雰囲気を和らげるべく、出だしに「えと、輔仁大学法学部の呉豪人です。名前は似ているのですが、呉観人先生とは赤の他人だ」と、近年愛用している冗談を、恥もなく披露してみた。すると、「ばかいいえ。何いい子ぶってんだ。この間テレビで見たぞ。野いちご事件で警察に無理やり機動隊専用のバスに運ばれてどっかへ連行されたのじゃないか兄弟二人とも」との野次馬が、満場の哄笑の中にもかかわらず聞こえました。ふんだ。それをいうならあなたも、あなたもだ。連行されたやつ、警察に殴られたやつ、その後一月に亘る自由広場でのデモに参加しているやつ、学生と教

授の抗議宣言に連署したやつ、今日から三日後開催予定の総統府前の大デモに参加しようと申し込んだやつ、みなこの場にウヨウヨいやがったのじゃないか(実は薛先生も陳先生もだ)。よくいうよ、なにが「権力への抵抗から権力を脱構築することへ」だよ。いままさに「権力への抵抗」の真っ最中じゃあるまいか。

ここで自粛して本題に戻ったワタクシでしたが、質問の時間になると、また黄富三大先生が戦端を開きました。「正直言って僕も実は最近の台湾の政治状況が心配で心配でならない。政権交代以来ずっとだ……」。結局、厳肅なる学問の場、2007年台湾史研究政治類の総検討のはずの第二セクションは、憂国の士の、国を憂うの場然と化したわけです。近年めったにない状況でしたけれど。

あまりおかしかったので、セクションが終わったら、私はすぐさま会場を後にしました。噂によりますと、第三セクション以降の行事はすべて平穩裡に終了したという。だが参加者全員の心の中が穏やかでなくなったことは明らかです。みな、2008年5月20日以来鬱積してきた直感的不安が、連日デモの学生たちに頼りにされて疲れきっている呉靱人氏の「暴言」によって引き出されたわけでしょう。

もちろん途中脱走した私は陳先生の歴史家自立＝脱政治宣言には異存がありません。むしろ大いに感服しました。また脱政治といっても、それは政治不参加に等しいということにもならないから、そもそも問題にならないはず。だが時期的にはちょっとまずかったとも思いました。台湾での台湾(史)研究という学問の成り立ちが最初から政治力とは切っても切れぬ関係にあったと思ったからです、否応なしにね。その点においては、平然と「現実政治と一線を画す」と公言して憚らない研究オタク、いな、純然たる学問をする日本人の台湾研究者が羨ましい。それでも台湾人の研究者らはよく頑張ったものです。がんばって、がんばって、がんばりまくって、ようやく脱政治宣言を申立てようとする時に、1987年以前に逆戻りになりかねない事態が生じた。われわれはまた再び否応なしに、政治力によって学問への精進を邪魔されるのだろうか、というシシュフォスの感慨に耽け、そしてうんざりしている。こうした蝨族に滅ぼされたローマ人的「またかよ」という理不尽さを味わわされたのは、日本に植民された時期から数えると、これで三度目だ。しかも今度入る邪魔は中国国民党と中国共産党との連盟からだという最悪のシナリオ。なんという薄幸な専門家たちでしょうか、台湾人として生まれたまともな研究者たちは。

余談ですが、私の駐日代表処の仕事が一段落した2008年9月上旬のある夜、代表処文化組の同僚たちは私のために送別会を開いてくれました。飲めないやつって有名な私ですが、この一年半の間、文化組の皆様にはすっかり世話になったので固辞するわけにはいきませんでした。さて、みなさんは大いに飲みました。宴もたけなわとなると、やがて飲み会からカラオケ大会となり、みなさんは次々と御得意の曲目をお歌いしました。「SACHIKO」から「黄昏の故郷」、「我是男子漢」から「ヨッパライの唄」、実に多岐にわたる曲目でしたが、いつものパターンだろうと考えた私は浅はかでした。なぜなら締め括りの二曲はなんと「中華民国頌」と「梅の花」の大合唱が出たからです。その二曲を聴かされた上、さらに歌われたのは実に30年ぶりでした。紅衛兵なみに激昂した「梅の花」に酔っている同僚たちに、私は思わず「もしかして、あの時代が帰ってきましたかい」と怯えながら聞きました。すると、その中の一人は酔い目で私を斜視し、そして親切に教えてくれた。

「はい。そういう予感がします」。

あれ以来、私は胃潰瘍、ニコチン中毒以外に、新たに不眠症に罹ってしまいました。かの時代の再来という予感のおかげで、私には、ようやく三種の神器がそろった。思わぬ収穫でしたが、この収穫で闇黒時代の再臨に抗するのにはどれほど役に立つだろうか。

2009年に入ると、台湾の状況はますますあやしくなりつつあるのです。近頃、聖書のある言葉が私の箴言となりました。

「洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らは分からなかったのです」。

学会・シンポジウム等参加記

林献堂、蔣渭水

—台湾歴史人物及其時代学術研討会参加記 羽根次郎（一橋大学大学院）

2008年8月31日から9月4日にかけて、中国河南省開封市開元名都大酒店にて、「林献堂、蔣渭水——台湾歴史人物及其時代学術研討会」と銘打ったシンポジウムが開催された。中国社会科学院台湾史研究中心と河南大学、北京聯合大学台湾研究院、台海出版社が四機関合同で主催した本シンポジウムは、折からの兩岸「雪融け」ムードを反映してであろうか、現場で配布されたパンフレットによる限りでも、59名の発表者が集う大規模な会議となった。

さて、発表の内容についてだが、まず最初に、中国社会科学院台湾史研究中心主任張海鵬氏司会による全体報告が行なわれ、ついで12の分科会に分かれ活発な討論が展開された。報告の内容は多岐に渡り、清代から21世紀の現代に至るまで実に幅広いものがあつた。したがって名称としては、「林献堂」と「蔣渭水」の名を冠してはいるものの、会議全体の印象からすると、「植民地」「抗日」「中華」あたりをキーワードとして台湾研究者が集まって意見を交換したとすべきだろう。

各分科会は当然のこととして、同時並行に行われたため、筆者は残念ながら全ての発表に触れる機会を持てなかった。ここでは、個人的に印象に残ったものを若干紹介しておくに止める。

王鍵氏（中国社会科学院近代史研究所）は「後藤新平与台湾總督府の旧慣調査」と題する発表のなかで、所謂「児玉・後藤時代」の政策転換期における旧慣調査について分析を行い、日本帝国主義の植民地として出発するための基盤整備との関連性を確認した。また李理氏（同上）は、「尿検法之父——改写台湾鴉片史的杜聡明博士」において、これまでとかく「総督府の漸禁政策の功績」とされやすいアヘン吸引者減少について、杜聡明の功績に改めて注目した。中国社会科学院近代史研究所の研究者による発表は、資料収集上の良好な環境を反映してか、駆使される史料が頗る広範に渡っているのが特徴的であった。

文学関係からの発表として、許毓良氏（輔仁大学）「光復初期の日拠台湾史研究（1945-1949）——以台湾島内発行的雑誌為例」では、近年になりようやく研究が活発化しつつある光復直後の雑誌出版情況にスポットを当て、全体的な内容分析による総論を試みた。一方、張重崗氏（中国社会科

学院文学研究所）は「葉榮鍾与 1930 年代的台湾文化」のなかで、葉榮鍾における文芸と庶民との関係の問題、知識人の問題などを時代情況とからめて論じた。

59名のうち、台湾側発表者は20名近くに上り、また、日本側からは松金公正会員と丸川哲史会員、筆者がそれぞれ、「日本殖民地統治初期布教使眼中之台湾仏教——以佐佐木珍龍為中心」、「光復後の文化空間——以楊達為中心」、「關於李讓礼“蕃地無主論”的萌芽」と題する発表を行なった。個人的に言えば、接する機会のあまり多くない大陸の台湾研究者との討論では、問題への光の当て方が異なることも多く、少なからぬ刺激を与えられた。

なお、日程の後半は「学術考察」が用意されており、会議参加者は開封市内はおろか、洛陽や登封（少林寺で有名）にまで足を伸ばし、古の寺社仏閣を見て回った。その実、開封には劉少奇終生の地が人知れず公開されており、今際を迎えた粗末なパイプベッドが中国現代史の哀しみを無言のうちに伝えているのだが、旅程には含まれていなかった。現代史を迂回した上での昨今の兩岸関係「雪融け」とは「和解」なのか「癒し」なのか、あるいは他の何なのか、思いを巡らさずにはいられなかった。現在の兩岸関係の磁場がよく象徴されていたように思う。

「比較殖民主義與文化」

国際学術ワークショップ参加記

阿部賢介（台湾・国立政治大学大学院）

2008年9月5日、台湾中央研究院台湾史研究所にて植民地主義と文化比較研究についての国際ワークショップが行われた。当日は台・米・独・日合わせて9名の報告者より、植民地支配類型の比較（第一セッション）、植民地主義と漢文脈（第二セッション）、殖民知識生産と文化政治（第三、四セッション）について報告が行なわれた。このうち、植民地帝国について、様々な興味深い新しい視点が提起された第一セッションについて、簡単に報告したい。

第一セッションは、吳叡人（中央研究院台湾史研究所）、駒込武（京都大学大学院教育学研究科）、梅森直之（早稲田大学政治経済学術院）より報告が行われた。吳は主にアンダーソンの「想像の共同体」論を引用し、植民地における現地住民（Natives）と移住住民（Settlers）の民族主義について、フランス統治下のアルジェリアと日本統治下の台湾の比較研究を行った。駒込は20世紀以降世界各地に存在した「帝国」の性質を分析した

上で、日本帝国の特徴を、君主制・宗教・言語という観点から検討した。また梅森は、日本の「戦後」と、旧植民地の「戦後」との関係を探るという観点から、日本帝国内の台湾とアメリカ帝国内のフィリピンとの関係に着目し、両者の植民地主義が戦後アメリカの日本占領に及ぼした影響の分析を試みた。

三者の報告に共通な事は、日本帝国によって遂行された植民地主義及び日本帝国自身の特徴を捉えようとする試みである。その中である程度のコンセンサスを得ている特徴は、日本の植民地支配が「海上の帝国」的性質を有している事である。日本とその植民地の関係は、民族的・文化的には比較的近接性があり、「陸続きの帝国」として看做す事も可能であるが、その支配形態は、圧倒的な近代化の差異による格差的コントロールであり、中心である本国と、周辺の植民地との関係が比較的隔絶されている「海上の帝国」的性質と言える。また三者共に、帝国を特徴づける上で、被支配者からの「反動」要素も重要だと位置づけている。駒込は被支配者の連帯可能性を探る為、日本統治下の台湾人が、如何に台湾と他の被支配国（インド、フィリピン）を比較したかという事を、今後の研究課題として取り上げており、呉は現地住民と移民住民の民族主義の起こりを、支配者の予期しなかった「移民植民地主義の二重逸脱（the double perversions of settler colonialism）」として、各帝国での支配形態の差異により、こうした逸脱の形態も異なる事を指摘している。更に梅森は、戦後のアメリカにより日本占領が、台湾・フィリピンという植民地を経由した「ブーメラン効果」であると指摘し、植民地から本国への植民地主義の回帰を描写した。

僅か3本の報告であったが、日本帝国を研究対象として、駒込が帝国としての全体的特徴を述べ、呉が帝国内部のアイデンティティ問題を取り上げ、梅森が帝国解体の戦後処理についての新しい枠組みを提起しており、広い範囲を含んだ帝国主義、植民地問題についてのセッションとなった。また、随所に興味深い問題提起も見られた。駒込は英国のケルト系ハイランダーが、英国国内では「野蛮人」と看做され、文明レベルが低いとされていたが、アジア・アフリカの植民地では、彼らが「文明的な白人」として表象されるという、「文明度」の問題を指摘し、梅森は、日本帝国とアメリカ帝国は、それぞれの植民地、台湾とフィリピンを通じて直接的に接触していた、別言すれば、お互いがお互いの植民地支配を鏡としており、両帝国の境界は決して本国同士を隔てた太平洋ではな

く、台湾とフィリピンの間にあるバシー海峡であったと指摘している。

日本植民地については、これまでも多くの研究が行われているが、日本帝国という上層システムの中で捉える事で、新たな視点を発見する事が出来ると感じた。日本の学者と台湾の学者では、問題の捉え方が微妙に異なっており、このようなワークショップを通じて、互いの論点を交換し合い、そこから更に多様な植民地研究の観点を見出す事が可能だと思う。（敬称略）

台湾における植民地主義と「日本」認識： 歴史・人類学的研究 石垣 直（日本学術振興会）

2008年9月27日・28日、東洋大学（白山）において標記のシンポジウムが開催された。同シンポジウムは、科学研究費補助金基盤研究 A「台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究：「日本」認識をめぐって」（研究代表者：植野弘子。平成18年度～20年度）の成果報告の一部をなすものであり、半世紀にわたる植民地統治、それを経験した人びとにとつての「日本」認識に関する報告が行われた。以下では、両日のプログラムを紹介し、討議の要点を整理したい。

【一日目】趣旨説明 植野弘子（東洋大学）

第1セッション 日常の中にみる「日本」：記憶の語りを中心に

日本語世代の語りの中の「日本」（五十嵐真子、神戸学院大学）／日本教育と台湾の日常：高等女学校生の家庭から（植野弘子、東洋大学）／コメント（堀江俊一、中京女子大学）／質疑応答

第2セッション 「理蕃」行政に見られる原住民族観念

警官用原住民族教科書から形成される原住民族へのまなざし（三尾裕子、東京外語大学）／否定された原住民族の旧慣：1930年代を中心に（笠原政治、国立民族学博物館）／コメント（魚住悦子、国際交流基金関西国際センター）／質疑応答

【二日目】第3セッション 台湾における日本／中華・中国の内部化と外部化

台北市古跡指定にみる日本、中華、中国のせめぎ合い（上水流久彦、県立広島大学）／台湾故宮と「中華」との距離：国立故宮博物院組織法の制定を中心に（松金公正、宇都宮大学）／コメント（松田京子、南山大学）／質疑応答

総合討論 司会：末成道男（東洋大学）／コメンテーター：洪郁如（一橋大学）、李鎮栄（名桜大学）

本シンポジウムの発表・討議から指摘できるポイントの第一点は、台湾における「中華」性の問題である。たとえば、第1セッションでは、当時台湾の人びとが新興近代国家としての「日本」と遭遇した時、その基礎には「中華」的なものが存在したのではないかと、その議論なくして台湾の「日本」認識を論じることが不可能ではないかという点に議論が集中した。また、第3セッションにおける上水流報告でも、古跡指定における「日本」性と「中華」性との記憶のポリティクスが、同じく松金報告でも、故宮博物館の運営に関する法整備の流れにおける「中華」意識の問題が論じられ、台湾における「中華」性を議論する必要性が指摘された。

第二点は「日本の近代」という問題である。台湾の人びとが半世紀にわたって日本の植民地統治を経験したとはいえ、植民地化および近代化をもたらした日本自体が当時まさに現在進行形の近代化を経験していたことは看過できない。たとえば、（迷信を信じるなどと言いつつ聞かせた日本もまた）「民間信仰の国」だったという被調査者の驚きに触れた五十嵐報告や、女学校卒業生らの植民地経験に関する語りを扱った植野報告に対し、当時の国内および植民地の宗教政策や教育状況に関する質問が続出した。台湾における植民地経験および「日本」認識は、日本が経験した近代と表裏一体の関係として議論する必要があるだろう。

第三に、両日の討議を通じて再三にわたって指摘されたのが、比較研究の必要性であった。たとえば、初日の討議では、一般参加者の川田順造氏から、細部に注意を払う台湾研究の長所を活かした上で、他地域との比較、理論的研究の可能性を追求すべきとの指摘がなされた。また、李鎮栄氏や洪郁如氏がコメンテーターとして参加した二日目の総合討論でも、「中華」性の問題や、日本による植民地統治の特徴を考えるためには、朝鮮半島および中国大陆における日本の植民地統治、および現地の人びとの「日本」認識が問われるべきだという意見が相次いだ。なお、第2セッションの議論（台湾原住民）と他の二つのセッションとの関係性が十分には議論されていない印象を受けたが、欧米諸国による植民地統治との比較を考える上でも、原住民からの視点は依然として不可欠であろう。

日本では、自国による植民地統治の研究が遅れているとの指摘がなされて久しいが、近年では諸分野で精力的な成果が発表されつつある。個別調査や関連諸分野とのさらなる研究協力を通じ、日

本が植民地統治した台湾の歴史と現在とが、より詳細に描き出されることを期待する次第である。

第12回現代台湾研究学術討論会 松田吉郎（兵庫教育大学）

台湾史研究会主催の現代台湾研究学術討論会が昨年も開催された。12回目となる現代台湾研究学術討論会は、2008年9月7日、関西大学100周年記念会館にて台北駐日経済文化代表処の後援で開催された。

澤井律之氏（京都光華女子大）の開会挨拶に続き、やまだあつし氏（名古屋市立大学）司会のもと、第1部の研究報告が行われた。松田吉郎（兵庫教育大学）「埔仔信用購買販売利用組合について」、圖左篤樹（京都大学大学院）「戦前台湾の繊維産業の発展」、下岡友加（県立広島大学）「黄雲芝の日本語文学—小説『紫陽花』を中心に—」の諸氏が報告され、河原林直人（名古屋学院大学）、湊照宏（日本学術振興会）、澤井律之各氏が評論者を務められた。

第2部は、現代台湾研究学術討論会初の試みとして、シンポジウム「台湾原住民の現在を考える」を行った。基調講演には、マサ・トフイ氏（タイヤル族民族議会議長）をお招きし、「泰耶爾民族議会議会と台湾原住民の自治」をテーマにお話いただいた。続いて、パネリストの方々に原住民政策、人類学研究、文学研究の立場から報告いただいた。林淑雅（台湾原住民民族政策協會）「台湾原住民の自治運動にみられる多元的かつダイナミックな発展」、五十嵐真子（神戸学院大学）「台湾原住民と人類学」、下村作次郎（天理大学）「『消音』の危機は去ったのか—台湾原住民文学の観点から—」のお三方である。

その後、総合討論に移り、呉豪人氏（台湾・輔仁大学）からの問題提起を受けた、活発な議論が交わされ、原住民をめぐる課題が浮き彫りにされた。

最後に、台湾史研究会代表でもある松田吉郎（兵庫教育大学）が閉会挨拶を行い、現代台湾研究学術討論会は盛会の内に終了した。

台湾史研究会は1977年に創立され今年32年目を迎えている。隔月に定例研究会、9月に現代台湾研究学術討論会、12月に日本台湾学会と共催で関西西部会研究会を開催している。機関誌『現代台湾研究』は35号（2009年3月）まで発行している。台湾とも交流を行い、2000年1月に東海大学と共催でシンポジウムを行い、2004年12月に政治大学と共催でワークショップを開催し、2006年

9月に静宜大学と共催で現代台湾研究學術討論会を行い、今回は台湾原住民、研究者をお招きし、討論会を行った。以上のように少しずつではあるが、研究活動が進展してきている。どうか日本台湾学会の会員諸氏も台湾史研究会にご参加戴き、台湾研究をさらに発展させて戴きたいと希望する次第である。

第二回「南瀛國際學術研討会」参加記 藤野陽平（東京外国語大学）

2008年10月18・19日に台南県の樹谷園區服務中心樹谷音楽庁で第二回「南瀛國際學術研討会」が「不停歇的江河、未休止的南瀛」というテーマで開催された。指導は行政院文化建設委員会、主弁は台南県政府、合併が台南県政府文化処、南瀛國際人文社会科学研究中心、国立台南大学台湾文化研究所である。本検討会は2005年に南瀛國際人文社会科学研究中心學術委員の企画で第一回が開催され、今回が2度目となる。台湾人が最も多いが、日本人3名、他アメリカ人1名による全17の研究発表と2つの講演が行われ、司会、コメンテーターは台湾内外から25名の研究者が名を連ねた。紙幅の関係で発表内容はもちろん、発表者名とタイトルも紹介できないが、日本台湾学会の会員では藤野陽平（東京外国語大学）「関与宗教と高齢社会の一考察：以基督教的老人团契為例」、植野弘子（東洋大学）「日本統治時期台南の高等女学校学生一從生命史觀察『日本』經驗與傳統習俗」、大東和重（近畿大学）「旅居台南時期の国分直一：發現具有多元文化的台灣」らが発表した。それ以外のプログラムは公式ブログ（<http://blog.yam.com/nanying2008> 2009年3月31日確認）を参照していただきたい。その他、歴史学、文化人類学、社会学、地理学、宗教学、建築学、哲学等、人文系諸科学から台南を事例として緻密なデータに基づいた報告がなされた。

本会議に対して私が問題として感じたのは、台南を事例としているという点で共通点があるが、残念ながら分野を超えた台南研究が打ち出せているとは感じなかったことである。よく言えば緻密に台南のことを調べ上げているのだが、それぞれ独自に研究を進めているだけで、分野を超えた研究者にはマニアックすぎると印象はぬぐえないだろう。そもそも、台湾研究ではなく台南研究を外国人研究者が積極的に取り組む學術的な理由を見出すのは困難であり、それを国際会議として開催することにはやや無理を感じる。

そうした問題はあったのだが、今回の参加者は申し込みの段階で400名近くにのぼったと運営側から聞かされた。実際、当日配布されたプロシーディングス（第二回南瀛國際學術研討会論文稿）には350名ほどの参加者が名を連ねている。多くは研究者や学生であるのだが、一般の人々も多数含まれている。また、質疑応答ではそうした一般の方からの質問・コメントが寄せられた。こうした一般からの台南研究に対する関心の高さは本会議の最大の特徴であり、最大の意義であるだろう。周知のように現在では台湾の地域研究が自由化され、地域への関心が深まっている。単に學術会に向けて発信するのではなく、地元の知識と學制的知識の相互交流によって台南研究から台南学へと研鑽していく可能性を強く感じた。國際的な議論の場を台湾人が台湾の地域研究のために提供し、地域の人間が幅広く参加する。今後、第3回以降の会議が開催されるのであれば、その動向は気になるところである。

「日本帝國植民地之比較研究」 國際學術研討会参加記 鍾淑敏（台灣・中央研究院）

中央研究院台湾史研究所の主催で、2007年10月に行われた同名のワークショップに続いて、國際シンポジウム「日本帝國植民地之比較研究」は2008年10月30日及び31日の二日間に中央研究院人文社会科学館第一會議室にて行われた。日本帝國の公式と非公式の植民地をあわせて、所謂帝國の枠組みで台湾の植民地統治を再検討するのが会議の目的であるが、一回目の今回はとりあえず韓国、満州との比較をやってみた。また、日本国内での研究成果を台湾に紹介するため、「帝國」を盛んに論ずる京都大学人文科学研究所を中心とする研究者を招き、比較研究を行った。

會議一日目は、第一セッションでは韓国の若手研究者の報告である。劉翠溶中央研究院副院長が座長を務めた。陳延湊台湾史研究所助研究員「從帝國邊陲再論日本帝國版圖：植民地台湾与朝鮮相互間的人流」、文明基仁荷大学韓国学研究所研究員「1920年代韓国与台湾自治運動之比較研究：以兩地的『歷史經驗』為中心」とそれぞれ発表された。許雪姬台湾史研究所所長がコメンテーターを務めた。

第二セッションでは「經濟」のテーマで、吳聰敏台湾大学經濟学系教授が座長を務めた。李力庸中央大学歴史学研究所副教授「日本帝國植民地的戰時糧食統制体制：台湾与朝鮮的比較研究

(1939-1945)」、林蘭芳暨南大学歴史系助理教授「戦時体制下台湾、朝鮮電力事業統合：以『営業報告書』為主的比較研究」という報告があった。コメンテーターは高淑媛成功大学歴史学系副教授が務めた。

第三セッションでは「日本帝国」というテーマで、呉密察成功大学台湾文学系教授が座長を務めた。山室信一京都大学人文科学研究所教授「国民帝国日本の構成と広域秩序論」、李昇燁京都大学人文科学研究所助教「日本帝国の植民地・勢力圏における在留禁止の制度と運用」とそれぞれ発表された。蔡慧玉台湾史研究所副研究員がコメンテーターを務めた。

第四セッションでは「教育」を中心として、黃富三台湾史研究所研究員が座長を務めた。葉碧苓亜東技術学院通識中心兼任助理教授「日治時期台北帝国大学与京城大学史学科之比較」、吳文星台湾師範大学歴史系教授「札幌農学校畢業生与台湾近代糖業研究：以台湾總督府糖業試驗場技師技手為中心」とそれぞれ発表された。鄭麗玲台北科技大学通識教育中心副教授、黃紹恒交通大学客家文化学院教授がコメンテーターを務めた。

二日目には同じ会場で四つのセッションが予定されていたが、会議が進行する一時間前、突然人文館の発電機が故障になって、急遽会場を活動中心二階の会議室に移した。幸いに参会の方々が全員無事で、会議も予定通り行われた。

第五セッションでは座長施添福台湾史研究所教授の司会の下に、春山明哲政治大学台湾史研究所客員教授「後藤新平の台湾経営と帝国日本の『学知』の系譜：比較植民地研究への基礎作業として」、林素珍東華大学民俗化学系助理教授「日治初期台東阿美族頭目職權之變遷」とそれぞれ発表された。傅琪珪（藤井志津枝）政治大学日文系教授、孟祥瀚中興大学歴史系副教授がコメンテーターを務めた。

第六セッションでは「保甲制度」というテーマで陳永發中央研究院近代史研究所長が座長を務めた。洪秋芬近代史研究所助理研究員「日治前期台湾保甲和街庄基層行政組織關係之探討：兼論滿州國的保甲制度」、王學新国史館台湾文獻館研究員「保甲制度的經濟分析：以日治期台湾与抗戰期大陸淪陷區之比較為主」といった報告があった。李若文中正大学歴史学系副教授がコメンテーターを務められた。

第七セッションでは座長謝国興近代史研究所研究員のもとで、鍾淑敏「治安警察法在日本帝國的運用：從治警事件談起」、黃紹恒「關於戰前台湾總督府官員退官後之經濟活動之研究」と報告した後、吳豪人輔仁大学法学系副教授、朱德蘭中央

研究院人文社会研究中心研究員がそれぞれコメントをなされた。

第八セッションでは施淑淡江大学中文系教授が座長を務められた。劉建輝国際日本文化研究センター准教授「近代東亜の『帝国』話語与『滿州』文学」、水野直樹京都大学人文科学研究所教授「植民地支配政策比較研究のために：朝鮮の『創氏改名』と台湾の『改姓名』」とそれぞれ報告なされた。李成機成功大学台湾文学系助理教授、蔡錦堂台湾師範大学台湾史研究所長がコメンテーターを務められた。

最後の総合討論では、第八セッションの直後のせいか、「創氏改名」と「改姓名」問題は特に話題になった。水野直樹教授は誕生日なので休戦しようと宣言したが、氏名と姓名との違いは最後まで参加者の興味を引いた。

シンポジウム「臺灣史研究的回顧與展望」

参加記

鈴木哲造（台湾・国立台湾師範大学大学院）

2008年12月4日（木）、台湾中央研究院人文社会科学館において、中央研究院台湾史研究所、国立政治大学台湾史研究所、国立台湾師範大学台湾史研究所の共催によるシンポジウム「臺灣史研究的回顧與展望」が開催された。参加者は、司会者、報告者、コメンテーター、及び事前に参加申込みを行い、リストに登録されている聴講者を合わせて、184名にのぼり、さらに当日駆け込みで参加する人もいたので、会場は大入り満員となった。台湾史研究に対する台湾学術界の関心の高さを感じ取ることができた最初の出来事であった。

さて、このシンポジウムは、これより前の同年7月に中央研究院台湾史研究所より刊行された『台湾史研究文獻類目 2007年度』に収録された書籍、雑誌論文、学位論文を基にして、2007年度の台湾史に係る研究成果を振り返り、その現状を把握するとともに、今後の発展の方向性を示そうとする試みであった。

『台湾史研究文獻類目』は、2004年7月に中央研究院台湾史研究所が正式に発足して以来、毎年7月に刊行されている文獻目録であり、当該年度に発表された台湾史研究の成果を網羅的に収録したものである。2007年度の目録では、文献を「通論」、「史前与早期」、「清代」、「日治」、「戦後」の時代別に、かつ「総類」、「政治」、「経済」、「社会文化」、「人物伝記」、「史料」の各研究領域に分類、整理している。文献は、中国語、日本語、英語で

執筆されたものに限って収録し、その総数は1,041点であった。

当日のプログラムは次の通り。

- ・第一セッション (9:05-10:15) 〈通論、史料及経済〉／司会者：林滿紅 (国史館館長)／報告者：張隆志 (中央研究院台湾史研究所助研究員)「婆娑之洋、美麗之島—2007 年台湾史通論及史料研究成果評介」／コメンテーター：黃富三 (中央研究院台湾史研究所研究員)／報告者：林玉茹 (中央研究院台湾史研究所副研究員)「2007 年台湾経済史的回顧と展望」／コメンテーター：黃紹恒 (交通大学客家文化学院人文社会学系教授)
- ・第二セッション (10:35-12:20) 〈政治〉／司会者：王泰升 (台湾大学法律学院教授)／報告者：鍾淑敏 (中央研究院台湾史研究所副研究員)「2007 年台湾政治史的回顧と展望—統治制度与帝国政策」／コメンテーター：李文良 (台湾大学歴史学系副教授)／報告者：陳翠蓮 (政治大学台湾史研究所教授)「台湾政治史研究の新趨勢—從抵抗權力到解構權力」／コメンテーター：吳叡人 (中央研究院台湾史研究所助研究員)／報告者：薛化元 (政治大学台湾史研究所教授)「2007 年台湾政治史的回顧と展望—外交、台湾国際法律地位及法律史」／コメンテーター：吳豪人 (輔仁大学法学系副教授)
- ・第三セッション (13:40-15:25) 〈社会文化〉／司会者：林瑞明 (成功大学歴史学系教授)／報告者：蔡錦堂 (台湾師範大学台湾史研究所副教授)「2007 年台湾史研究回顧と展望—教育、体育休閒、宗教、媒体伝播類」／コメンテーター：周婉窈 (台湾大学歴史学系教授)／報告者：張素玢 (台湾師範大学台湾史研究所副教授)「2007 年台湾史研究回顧と展望—家族、建築、区域、医療、原住民」／コメンテーター：吳学明 (中央大学歴史研究所教授)／報告者：黃美娥 (台湾大学台湾文学研究所教授)「2007 年度台湾文学、音楽、戯曲、美術、女性議題研究的回顧与省思」／コメンテーター：施懿琳 (成功大学台湾文学系教授)
- ・第四セッション (15:50-16:20) 〈総括〉／許雪姬 (中央研究院台湾史研究所研究員兼所長)
- ・第五セッション (16:20-17:00) 〈総合討論〉

「通論、史料及経済」、「政治」、「社会文化」の各セッションにおいては、基本的に報告者がそのテーマに合致する主要な文献を『台湾史研究文献類目』から抽出し、その内容を一つずつ分析し、最後に展望を述べるという形式で進められた。紙幅の関係から、各分野で示された研究の現状と展望を普く紹介することはできないが、特に印象に残ったことについて、以下三点に纏めてみたい。

第一に、史資料の収集、電子化、公開等の積極的な取り組みにより研究環境の整備が一段と進展したことで、これらの史資料を利用した多くの研究が生み出されていることである。

試みに、近年の日本統治時代の史資料情况の一端について紹介すると、中央研究院台湾史研究所は、史資料の収集と公開・刊行を積極的に推進しており、直近の成果として、公学校教諭であった黄旺成の日記である『黄旺成先生日記』を出版している。電子化については、当時の社会事情を知る上で最も基本的な資料である『台湾日日新報』の全紙面が電子化され、いくつかの公共、及び大学図書館等に配備されているが、これには、キーワード検索機能も付されており、即座に必要な資料にアクセスすることが可能となった。そして、周知のように、『台湾総督府公文類纂』については、インターネット上から電子化された資料を取得できるようになっており、さらに、2008 年 9 月からは、台湾大学法律学院の主導により、各地方法院の判決原本等が収録された『日治法院檔案資料庫』の運用が開始されている。

以上のような良好な研究環境の出現は、新たなテーマの開拓に貢献し、台湾史研究の多様化を促している。しかし、鍾淑敏・中央研究院台湾史研究所副研究員がその報告の中で、便利な研究環境に甘んじて、史資料の全体像、特性、制限をよく理解しないまま、それを時系列的に並べるだけの研究が少なからず存在しているとし、歴史研究方法を再検討する時期にきていると述べているように、一方では、歴史研究者が史料に対して如何に厳正に向き合うべきかという問題を再認識させることにもなった。

第二に、台湾史を「清代」、「日治」、「戦後」という時代のカテゴリーで截然と分けて考察するのではなく、政権を超越した連続の中に位置づける観点を持つべきだという認識の広まりである。例えば、「日治」から「戦後」にかけての留用の問題や各種制度、法令あるいは技術等の継承と断絶の問題は、現在少なからぬ研究者によって取り組まれており、今後も注目すべき課題であると思われる。

第三に、「日治」及び「戦後」研究への偏重と「清代」、「史前与早期」研究の相対的不足に対する危機感である。『台湾史研究文献類目 2007 年度』に掲載されている時代と分野別の統計表によると、「日治」(335 点)、「戦後」(271 点)を扱っている研究に対して、「清代」の研究は量的に劣っており(134 点)、さらにオランダ時代や明鄭時代等の研究を包括している「史前与早期」は非常に少ない(13 点)。それは、資料上の制約もある

が、許雪姬・中央研究院台湾史研究所長が〈総括〉において、「清代」や「史前与早期」を研究する人材を育成していく必要性を強調していたように、相対的な研究者不足がその最大の原因であり、これらの時代の研究を将来担っていく若手研究者の養成が今後精力的に進められていくことが期待される。

許雪姬所長は、また閉会に際して、このシンポジウムを毎年継続して開催していきたいとの希望を述べているが、全体的にみれば、台湾史研究の現状と課題を理解する上で、非常に意義があるシンポジウムであった。本年も開催されることを切に願うと同時に、開催の際は、再び足を運びたいと思う。

第6回関西西部会研究大会 澤井律之（京都光華女子大学）

昨年12月6日、京都光華女子大学において台湾史研究会との共催で第6回関西西部会研究大会が開催された。内容は以下のとおり。

＜研究発表＞

1. 日本統治時代における台湾の職業教育に関する一考察—私立職業学校の設立の経緯と展開を中心に—

発表者：小野憲一（龍谷大学大学院）

評論者：呉 宏明（京都精華大学）

2. 張我軍のもう一つの作品—小説「八丁大人の手記」について

発表者：劉 海燕（名古屋大学大学院）

評論者：澤井律之（京都光華女子大学）

3. 日本の鉄道史から見た昭和期台湾鉄道

発表者：やまだあつし（名古屋市立大学）

評論者：河原林直人（名古屋学院大学）

以上司会：今井孝司（帝塚山大学非常勤講師）

＜講演＞

歴史としての台湾引き揚げ

講演者：大川敬蔵

司 会：下村作次郎（天理大学）

大川氏の講演が好評を博し、参加者も予想以上に多く、盛会のうちに幕を閉じた。

第2回台湾客家研究国際研討会 黄紹恒（台湾・国立交通大学）

「2008 第二屆台灣客家研究國際研討會」は2008年12月20日から21日までの二日間、新竹市にある国立交通大学で開催しました。同国際学術会議は、2006年に中壢市にある国立中央大学で行った第一回の続きで、国立交通大学客家文化学院院长莊英章氏が秘書范美華氏以下の関係諸氏を率いて台湾客家研究の一大盛事を推進したものです。

台湾客家に関する研究は日清戦争後、植民地統治に資するために台湾総督府がこれを開始したと言えますが、近年の台湾客家研究はまったく別の歴史文脈によって始まったのです。

現在の台湾客家研究は歴史を溯れば1987年の戒嚴令解除との関係が深く、同年に台湾客家問題に熱心な者は「客家風雲雜誌社」を創立し、過去10数年間に蓄積したエネルギーをもとに同雜誌社の主導で「還我母語」を主題とするデモを発起して、台湾社会における台湾客家の存在をキャンペーンしました。2年後本土意識を濃くもっている「台湾客家公共事務協会」の成立をきっかけに、台湾客家運動が広く台湾各地に進められていきました。また、このような発展は単独的なものでなくて、同じ時期の台湾社会は民主化とそれにもたらされた社会価値の多元化という現象も現れて、むしろ前者が後者の一部にもなっていると言えます。2001年行政院客家委員会の設置はこのような絶え間のない努力の成果の一つにもなります。

もう一つの重大な成果は、台湾客家研究が台湾の学術研究において新たに出てきたジャンルとして、特に上記の客家委員会と教育部の国家的な援助を得てその第一歩を踏み出したことです。特に大学の中に台湾客家研究の専門組織が雨後の筍のように設立されました。北から南へ大まかに見ると、開南大学客家研究センター、国立中央大学客家研究センターと客家学院、明新科技大学客家研究センター、国立交通大学客家文化学院、国立聯合大学客家研究学院、国立成功大学客家研究センター、国立高雄師範大学客家文化研究所、輔英科技大学客家健康研究センター、国立屏東科技大学客家産業研究センター、美和技術学院客家社区研究センターです。

今回、国立交通大学客家文化学院の主催である国際学術会議のテーマは「『客家』的形成與変遷：文本、儀式與日常生活」（Formation and Transformation of Hakka: Text, Ritual and Everyday life）というもので、論文を発表した

学者は日本を始め欧米、東南アジア、中国からやって来て、台湾客家研究を各側面から参加者と一緒に盛んな議論を交わしました。

同会議のスケジュールは次を参照してください。<http://hakka.nctu.edu.tw/conference2008>

日本台湾学会活動報告

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会) 活動状況 担当理事 張士陽 (早稲田大学)

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会) 第 47 回。

2009 年 2 月 3 日 15 時 30 分から 17 時 30 分まで新宿野村ビル 48 階 野村コンファレンスプラザ ルーム D において開催された。報告者は中国人民大学国際関係学院教授の黃嘉樹氏でテーマは「馬英九登場後の兩岸関係」、馬英九政権登場後の兩岸関係および胡錦濤政権の台湾政策について報告された。参加者は 8 人。

台北定例研究会 担当幹事 富田 哲 (台湾・淡江大学)

ニュースレター 15 号で、昨年 7 月の第 46 回台北定例研究会までの状況を報告したが、その後、8 月 25 日に第 47 回、12 月 20 日に第 48 回を、ともに台湾大学台湾文学研究所で開催した。

第 47 回は報告者に岡本真希子氏 (早稲田大学)、コメンテーターに李承機氏 (成功大学) をおまねきした。「日本統治時期台湾の法院の司法官僚たちー判官・検察官・通訳たちの諸相」と題する報告では、日本統治期の法院判官、検察官、およびかれらと裁かれる者のあいだの媒介者となった法院通訳が話題となった。判官のほとんどと検察官のすべてが「内地人」(日本人)であったということだが、かれらの「内地」と台湾のあいだの移動の様相が詳細な分析によってあきらかにされた。一方、法院通訳には「内地人」も台湾人もいたが、かれらが学習雑誌などでかわしていた、自身の職務や「台湾語」にかんする議論も具体的に紹介された。

第 48 回は、9 月から政治大学台湾史研究所に客員教授として滞在していた本学会の春山明哲理事

長 (早稲田大学) に「日本における台湾研究の最近の動向と今後の展望」というタイトルでお話をいただいた。また張隆志氏 (中央研究院) には、「対話人」として近年の台湾史研究の動向の整理をお願いした。春山氏の報告は、第 10 回学術大会記念シンポジウムでの基調報告とパネルディスカッションの内容、および今回の台湾滞在中の経験、観察などが中心となったが、第 10 回大会に出席していない参加者も多く、有意義な議論をかわすことができたと思う。春山氏は政治大学の授業以外にも、この 3 ヶ月のあいだ、数多くの場で報告や講演をされていたが、本例会がそのしめくりの場となったことは、われわれ企画に当たった者にとってうれしいことであった。

なお、以上のくわしい内容については、学会サイトの「定例研究会報告」をごらんいただきたい。

気がついてみれば、台北定例研究会は、まもなく 50 回の節目をむかえることになる。回数そのものにそれほど意味はないのかもしれないが、これまでの例会の告知や参加体験記をながめてみると、実に多くの方からお話をうかがうことができたのだと実感する。例会に参加して議論をもりあげてくださった方も含めればなおさらのことである。

「山椒は小粒で・・・」ではないが、小規模ではあっても、というよりは小規模であるからこそ活発なやりとりを楽しむことができ、また参加者どうしが気軽に関係を築いたり、交流をさらに深めたりできる空間を、今後も準備し続けていきたい。

学会運営関連報告 担当理事 佐藤幸人 (アジア経済研究所)

I. 【第 5 期理事会常任理事会第 5 回会議議事録】 (抄)

日時 2008 年 11 月 29 日 (土)

場所 東大駒場キャンパス 18 号館 4 階コラボレーションルーム 3

1. 第 10 回学術大会決算について報告があった。第 10 回大会の開催にあたっては、李遠哲博士の記念講演に関して、交流協会から格別の支援をいただいたこと、また、李博士の東京での移動では、代表処の協力があったことが報告された。

2. 第 11 回学術大会の準備に関して、現段階の状況について報告があった。

3. 第 11 回学術大会分科会企画・自由論題についての提案があった。自由論題 1 本が不採用。それを除いて、分科会企画は 2 セッション企画が 1 本、1 セッション企画が 3 本、自由論題 10 本。政治・

経済関係に関する分科会の応募状況が芳しくないため、追加企画を用意することになった。

4. 第11回大会のシンポジウムの準備について報告があった。

5. 今後の大会での記念講演／シンポジウムの企画体制に関して、問題提起があった。

6. 学会報の発行について報告があった。第11号への投稿に対する評価では、厳しい評価が目立つという説明があった。また、編集作業のアウトソーシングは、現在、想定している予算では難しいので、第11号はこれまで通り編集委員会で作業を行うことになった。

7. 国立台湾大学からの情報提供の依頼があり、提供することが了承された。

8. 東京大学東洋文化研究所からの「共同利用・共同研究拠点形成についてのお願い」があり、「要請書」に協力することが了承された。

9. 会費未納の会員に対する働きかけを強化することが確認された。

II. 【第5期理事会常任理事会第6回会議議事録】 (抄)

日時 2009年3月7日(土)

場所 東大駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム4

1. 理事長から台湾滞在中および帰国後の活動について報告があった。

2. 総務担当理事から、選挙管理委員会から送られた第6期理事選挙の結果について報告があった。

3. 総務担当理事から、前回の常任理事会以降、持ち回りによって処理した3つの案件について報告があった。

4. 編集委員長より、『日本台湾学会報』第11号の編集状況について報告があった。

5. 第11回学術大会の準備状況について、実行委員長より報告があり、今後の進め方について確認した。

6. 第11回学術大会会計担当委員より、大会予算案が報告された。また、交流協会経費協力が公募形式に変更されたことが報告された。

7. 会費を未納している会員に対する働きかけを強化することが承認された。

* * * * *
・本号特集をお読みになったご感想・ご意見をぜひお寄せください。
・「学会等参加記」は予想を上回る投稿を頂戴しました。「台湾研究情報」への投稿もよろしく願います。
・まもなく今年度の学術大会が開催されます。会場でお会いできますことを楽しみにしております。(前田直樹)
* * * * *

日本台湾学会ニュースレター 第16号

発行：日本台湾学会（代表 春山明哲）

発行年月：2009年5月

■日本台湾学会事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

東京大学教養学部 18号館 923 若林研究室気付

FAX: 03-5454-6416

E-mail: nihontaiwangakkai@ask.c.u-tokyo.ac.jp

■ニュースレター発行事務局

〒739-8525 広島県東広島市鏡山 1-2-1

広島大学大学院社会科学部 前田研究室気付

FAX: 082-424-7246

E-mail: jats-newsletter@hiroshima-u.ac.jp